

---

# 雪風と黒騎士（ゼロの使い魔×Fate）

戒辰

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪風と黒騎士（ゼロの使い魔 × Fate）

### 【Zコード】

N4447F

### 【作者名】

戒辰

### 【あらすじ】

ゼロ魔の世界に黒セイバー推参。唯我独尊、タバサに触るな！！！  
下郎！-!をもつとつに頑張つてもらいます。

## 1話・運命と雪風（前書き）

この作品は、戦闘描写に貧弱な作者の為の試験的な意味合いの物となります。

### 注意事項

- ・タバサとアルトリア（黒）が主人公となります。
- ・原作は有る程度までは同じですが、根本的に崩壊する予定です。
- ・作者はゼロ魔原作の知識がWikiaとちまたにある一次創作しかありません。
- ・独自設定が入ります。
- ・アルトリアは最強だと思います。
- ・アルビオン編で一度終了する予定がありますので、それほど長く続かないかもです。

以上の事に嫌悪感が湧く方は、お読みになられない方が得策です。

## 1話・運命と雪風

「我が名は……」

「使い魔召喚の儀式」。

それに赴くタバサは、少しだけ不安を感じていた。

その不安の原因は、今から唱える呪文。

「我が名は……タバサ」それは、本当？ 違う、私の本当の名前じゃない。

この先の人生、その終<sup>つい</sup>の相方となる存在。そんな大事な存在を召喚するのに、偽名。

もしかしたら、呼掛けに答えてはくれないかもしれない。

一足先に、召喚を成功させた親友に目を送る。

彼女はサラマンダーを足元に従え、私が何を召喚するのか楽しみにしている。

ただ一人の親友。彼女を落胆させたくない。  
だけど、私は全てを語れるほど覚悟が無い。  
だから、これは仕方が無い。

仕方が無い。まだ、話せない。

「我が名は……タバサ、五つの力を同るペンタゴン。 我の運命に従いし使い魔を召喚せよ」

心の内で呟く。

(我が名は、シャルロット・ヒレーヌ・オルレアン)

既に母様に差し上げた、本来の名前。

これで、失敗したとしても。私は目的を遂行するまで諦めるつもりは無いから。

親友の期待を裏切るかもしれないけど、それでも名は晒せない。そしてタバサは在る意味、予想外な音を聞いた。

## シャラン

そんな、綺麗な金属音。

爆発する訳でも無く。幻獣の鳴き声でも無く。目の眩む様な閃光も無い。

ただ、静かな金属の擦れる音。

「え？」

その声は、誰が発したのか。

或いは、ここに居る全ての者の眩きかもしない。

誰もが唖然とした。

誰もが目を疑つた。

タバサと呼ばれる少女が召還したのは人間だったから。だが、平民では無い。

召喚された者は、赤い血管のような模様が広がる黒いプレートメイルに身を包み。

眼前に剣を突き立て、目を閉じつつも、その上で手を組んでいる。そして、ディテクト・マジックを使はずとも感じる、圧倒的な魔力。

その姿は、誰が見ても「王」。あるいは騎士。

誰が平民を召喚した等と罵れよ。

その言葉を吐いた瞬間に、その人物はこの世から消え去るだろう。

それほどの霸氣を、Iの騎士から感じじる。

誰もが息を飲み。

召喚者であるタバサすらも、その威圧感に氣圧されている。

そんな中、一人の教師が声をあげた。

「あ、なたは、一体、ナニを召喚したのですか……」

それは咳きのような物だつた。

だが、彼の声には恐怖が宿つていた。

教師の名は、コルベール。

【炎蛇】の名を冠するメイジ。

学園に置いて屈指の戦闘経験・戦闘技術を持つメイジの一人。故にだろう。

騎士のかもし出す霸氣。それを正しく理解できたのは。

コルベールが感じたのは霸氣などと生ぬるい物ではない。これは、殺氣。

それも高純度のソレを、幾重にも押し殺し、それでも尚、外に漏れ出る程の膨大な殺氣。

「メイガス」

その一言で、凍り付いていた空間に僅かな歪が入る。

声そのものは鈴の音のように美しい。

しかし、音程は底冷えのするような低音。

その声に反応するよつこ、一步。タバサが騎士に近寄る。

「此度の召喚、如何な趣があつての事か

目を閉じたままの発言。

それは疑問ではなく。強制、答えよ。ありありと解るそんな副音

声。しかし誰もが争えぬ何かを感じる。

「私の、使い魔になつて欲しい」

「クリと咽喉を鳴らし。

怯えを飲み込む。

そして、わずかに胸を張つての言葉。

「私を使役する、と？」

「そう」

閉じられていた瞳が開き、濁った金色がタバサを見つめる。

「その身は我が剣を捧げるに値するのか？」

その問いに、タバサは内心考える。

自分は元王女。騎士が仕える身分としては十分。だけど、今は名を捨て暗殺者として生きている。

……。

どうなのだらう。

「沈黙なれば、その身は我を抱え込むと判断する」

「まつて」

タバサは焦つて口を開く。

「私は、貴方の仕えるに相応しい者ははず」

その言葉を言い切ると同時に。

「ひあああつああああつ……」

「うわあああああつ……！」

「あや―――つ……！」

広場に殺気が充满した。

殺気なんてものとは縁の無い貴族の子供達は、己の死を幻視し。それに近しい所にいたコルベールは、タバサを抱え後退する。キュルケもまた、襲い来る吐き氣に耐えタバサの元に駆け寄る。

「え？」

タバサと言えば、何を間違つたのか解らなかつた。何故、これほどまでに殺気が満ちているのか。私の召喚した使い魔が発しているから。だけど、何故？

「メイガス」

自分に向けられた怒氣に、恐怖で心が震える。

「上辺の言葉で私を使役しようなどとは、笑止」

ああ。だから。

「己の言葉に誇りを持てぬ者が、私を捕える事など出来はしないと心得よ。その身引き裂かれたくなくば、早々に送還の儀を行え。汝に仕える気は失せた」

興味を失ったかのよつて口を閉じる騎士。

でも、それは。

「ルベルに目をやると首を横に振る。  
つまり、送還の儀など元から無いと言つ事。

「まつて」

周りの喧騒など知らないとばかりに騎士に声をかける。

「やめなさいって。」とタバサを気遣うキュルケだが、それにもタバサは「大丈夫。」と返し、騎士に向かつて歩む。

「今は、地位も身分も低い」

スウと息をする。

「だけど、いずれ高い地位に着く。だから使い魔になつて欲しい」

騎士は無言。

だが、発する殺氣は先ほど以上に強烈な物となつている。

「貴様は、私を権力で買えると思つているのか？ 愚か者め。眞の騎士とは権力に仕えるのでは無い。主たる人物の誇りに、己の譲れぬ矜持に、そして祖国に仕えるのだ。己の美德を信じ、己の矜持を貫く。それが騎士と言う物だ。それを理解していない貴様は……」

消えろ。

それは、タバサの耳元で囁かれた。

咄嗟に杖を盾にしようとするが遅すぎた。

タバサには騎士が消えたようにしか見えなかつた。  
残滓すら見えず、懷にもぐりこまれた。

それら全てが致命傷。

終る。

自分の脇で身を屈ませ、下から斬り上げる体勢でいる騎士を見て、  
タバサはそう思つた。

何も果せぬまま、終る。と。

だが、その窮地を救つたのは

。

フレイムボールッ！！

キュルケとコルベールの魔法。

急な展開ゆえか、協力しての火と火の一重奏。  
中規模な炎の塊は騎士に向かつ。

殺つた。

キュルケもコルベールもそう思つた。  
必ず命中すると。

そして、あの規模の魔法の直撃は確実に手傷を負わせる。  
その瞬間の安堵。

コルベールは欠片の油断も無いが、実戦経験のないキュルケには  
油断が出来た。

炎の行く末を見守る二人とは別に。  
タバサは騎士をジッと見ていた。

斬るのであれば、恐らく一瞬。  
すでに自分の命はないはず。

フレイムボールなど、私を殺してからでも対処できる。  
だが、騎士はタバサを一瞥したのち躊躇も見せず、火球に向かつて  
跳躍した。

「なつ！！」

それに驚愕したのは、これを見ている全員だらう。

騎士に直撃するはずの火球は、騎士に当るその瞬間に、消滅した。まるでそこに壁があるように、唐突に消えた。

そして虚が生まれた。

コルベールは有り得ない事象に一時停止し。

キュルケもまた、油断から来る笑顔で表情が固まり。

タバサもまた、詠唱しようとした呪文も忘れ固まつた。

すべての事柄が頭で整理される前に、この戦闘とも言えない一方的な武力行使が終つた。

あの一瞬の間に、騎士はキュルケの腹を蹴り飛ばし。コルベールの杖を斬り裂いた。

そして現在は、倒れたキュルケに剣を突きつけている。

「今の魔術は見事だつた、メイガス」

「あら、ありがとう」

引き攣つた表情での返答。

声も体も恐怖に震えている。

それでも、気丈に振舞うのは彼女の性格故だらう。

「だが、ここで終れ」

眼にも口調にも、何の感情も籠っていない。

ただ、それが今から行われる事だ。

そう淡々と述べる。

騎士にとつて、たつたそれだけの事なのだ。

「待つて…………」

親友が死ぬ。

想像しただけでこんなにも、心が痛い。  
それこそ、引き裂かれるようだ。

「貴様の待てとの言葉に2度従つた。本来であれば一度目すらも無い。  
これが最期の機会と心得なさい」「…………」

キュルケからは視線を動かさずに告げる。

「貴方の下に居る女性は、私の親友」「  
だから、なんだと言つのか」「殺さないで」

騎士は冷めた眼でキュルケを見る。

キュルケにしてみれば、嬉しいのと怖いのが半々でなんとも胸が  
高鳴る状況だつた。

もつとも高鳴るとは恐怖と緊張で、だが。  
タバサのハツキリとした親友と言つ言葉が、泣き声にならなくな  
りに嬉しく。

騎士に見つめられる冷酷な、いや、そんな感情すらも無い眼に恐  
怖を感じる。

「なんの対価も無く。友の助命を乞つか」

タバサはギュッと杖を握り締める。

「何が、欲しいの」

騎士の要望が自分の命であるなり……。  
それは認められない。

そうなると、私は親友を、見捨て、る?  
キュルケを見捨てる?

「誇りを」

「？」

悲壯。と言つまでの覚悟を決めよつとした時に、そんな言葉を貰つた。

だけど、何に対する誇りなのか。

「悪に染まらず、それすらも飲み込む寛大さ、巨悪に対する勇気、  
弱きにも強きにも差別無く接する誠実さ」

それは、確かに誇り。

貴族が持つてしかるべき美德の数々。

「何よりも、己を貫き通す信念。それを汝に望む」

何故か、意外な気がした。

みるからに騎士だけど。

それは暗黒騎士と言う姿。

それが、狂気にそまつた狂戦士。

そんな人物が、美德の数々を私に求める。

視線はすでに私に、キュルケに突きつけられていた剣もすでに霞に溶けた。

私に集まる視線は様々。

私の答え一つで、この場が殺戮の場になるかどうかの瀬戸際なの  
だから、仕方ない。

未だに戦闘態勢なのはコルベール教授のみ。

キュルケはまだ地面に倒された体勢から起き上がる事が出来ず。他の生徒は、そもそも戦闘体勢にすら入っていない。

キュルケからの心配するような視線を感じながらも、タバサは口を開いた。

「解った」

ただ一言だけ。

しかし、想いが詰まつた言葉である事は確かだった。先の2回の発言は、タバサにしても軽い言葉だったと思つ。それ故にこれには万感の思いを込めた。

「その言葉、違える事在らば……」

「解つてゐる。貴方が私を斬る」

「いかにも」

「大丈夫。貴方の求める物が無くなれば、私は死んだも同じ。貴方が斬らなくとも、自分から死ぬ」

「よからう」

その言葉を発した後、騎士がタバサの前に膝を付き、頭を垂れる。

「契約」

「ああ。だが、その前に名を聞きたい」

頭を下げたままの体制でのやり取り。

「……タバサ」

ピクリと騎士の肩が揺れる。

「名を」

2度目の催促。

偽名だと言うのがバレたのか。  
いや、バレバレの偽名だった。

そう思い直して少し冷や汗が出る。

騎士は、またも2度目を許してくれるようだ。  
騎士の耳元まで、顔を寄せる。

「シャルロット。シャルロット・エレーヌ・オルLEAN。私の名前

「承知した」

「貴方は？」

「私の名は、ルシウス・アルトリア・カストウス。またの名をアル  
トリア・ペンドラゴン。竜頭の位を得る、最強の騎士なり」

「解った」

それから、どちらからと言つ事も無く。  
口付けを交わす。

轟。と二人を中心にならぶるエーテル。  
エーテルは騎士、アルトリアの肩に集束していく。  
そしてエーテルが書き込む、ルーン。  
その意味を知り、アルトリアは少しだけ微笑む。

「またも、風の加護を得る事が出来るとは

その微笑みに、タバサもまた微笑みを返す。

「貴方は笑つた方が良い」

「それはシャルロットにも言えるでしょう」

そう?

そう呟いてタバサの意識は途絶える。  
崩れ落ちるタバサを抱きとめるのはアルトリア。

「タバサ！！」

キュルケは顔面を蒼白にして駆け寄つてくる。

褐色の肌が僅かに青ばむのだから、その心情は押して知れよう。

「タバサに何を！！」

「心配する事は無い。契約における魔力の大量消費で気を失つただけだ。」

「うそっ！！ 私はそんな事にはならなかつたわ！！」

面倒な、内心そういうながらも無碍には扱えない。  
主の友だと言ひつのなら、コレから先も顔を合わせる事になる。

「私を下級のファミリアと同列に考えるな。維持には魔力が必要、  
そしてそれは成熟した魔術師数十人分。命を失わなかつただけでも  
有り難いと思え」

しかし。妙に馴染む。

アルトリアはアルトリアで妙な違和感を感じていた。

召喚されてすぐにはマスターは判明した。

すでにラインが通つていたから。

だが、この身は既に外道に落ちた身。

ならば、召喚者もまたそのうのではと勘繰つた。

しかし、その予想は在る意味外れていた。

まだ少女と言う年齢の女子。

落ちるか落ちないか。それは解らない。

ただ、その身に不相応な何かを内包している事は感じ取れた、それも籠が外れれば一直線に外道に落ちる類の物を、故に脅しもかけて美德で持つて封じた。

ルーンが刻まれてから、魔力炉心は正常に稼動し、タバサの支援なくしても体の維持は出来る。

むしろ、魔力が張りすぎている為に、少し膨れているような感覚を受ける。

タバサと契約する以前から、魔力の減りは極少。  
軽く戦闘をこなしてみたが、俊敏性が向上している。

謎が多い。

今回の召喚は、少しだけ興味深い。

未だに喚き続いているキュルケを適当に相手をしながら、医務室に案内させる。

その後、召喚の儀式では、ゼロのルイズによる。

平民の召喚が行われたが、誰もそれを非難する事は出来なかつた。ルイズ自身かなり精神的にまいつていたので、キャンキャン喚かずにお人と契約を済ました。

コルベールは才人のルーンに多きな興味を惹かれたが、それ以上にタバサの召喚した騎士に対しての警戒が強かつた。これは後に想いもよらぬ関係に繋がるのだが……。

この夜。

アルトリアは二つある月に大いに驚き、キュルケにどう言う事だと質問攻めにしていた。

これは一重にタバサが未だに眠っているからなのだが、キュルケ

は明け方まで、世界に対する常識やら何やらをアルトリアに教えるハメになり、折角手に入れた自分の使い魔も鑑賞する事が出来ず、かなり不機嫌になつたらしい。

南無。

## 2話・呪われし微熱

召喚の儀を終えた翌日。

キュルケ・フォン・ツェルプストーは疲れきっていた。

何故かと問われれば、今キュルケの随分前を闊歩する少女が原因に他ならない。

実を言えば、キュルケは昨夜眠っていない。

突然怒鳴り込んできた騎士の話に付き合つていて、全く眠れなかつたのだ。

どう言つ訳か、あのとんでもない騎士はこの世界にとつての常識を全くしらなかつた。

曰、あの月はなんだ。

曰、マナが豊富すぎる、どう言つ事だ。

曰、重力制御が初步だと? ふざけるな。

曰、私に夕餉を出さないとはい度胸だ、斬り捨てる。

曰、夕餉も出ず、夜食も無いだと? 皆殺しだ。

曰、曰、曰。

下らない話から中々興味深い話題と延々と話していた。

だが、眠れなかつたのは何も話に興味を引かれたからだけではなかつた。

騎士甲冑を見た時は、キュルケは男性だと思っていたのだが、甲冑を脱いだらなんとも不思議。漆黒のドレスも相まって、絶世と言つてもいいだらう美少女へと変貌した。

そして、キュルケには女の子と夜の営みを行う趣味は無かつた。

故に、「予定も入つてゐるし、また明日にしない?」

恐る恐るそう提案したのだが、答えは。

「なるほど、つまり死にたいと?」

そんな恐ろしい答えだった。

もちろん「冗談だと思ったのだが、いや、思いたかった。

悲しいかな、今日殺されかけた手前冗談には聞こえない。

そんな事で殺すとかの話になるの！？

慄くキュルケ。

そして矢継ぎ早に質問をしてくるアルトリア。

途中で寝そうになれば、眼前に禍々しい剣が突きつけられ。

「よもや、眠りそうになつたのでは在るまいな。」

殺ル氣まんまんな顔で、そんな事を言われる。

眠れるわけがない。

そして、途中乱入してくる男どもは、全てアルトリアに斬り伏せられた。

「邪魔だ。」

「鬱陶しい。」

「ハ工め。」

「貴様、男を躰けておけ。」

「……消える。」

キュルケは一晩でどれだけの命を救つたのか。

アルトリアが止めを刺そうとする前に羽交い絞めにし、説得する。

しかも、途中でお腹がへつたのか、キュルケに夜食を取つて来るように指示を出してきたのだが。それも量が不満だったのか。

「この程度で私が満足するとでも？」

「……3人前はあるわよ。」

「不快だ。」

「そんな事言つてもしようがないじょ？　コックもむづ寝ちやつたし。」

「起こせ。」

「そんな無茶言わないでよ。もう何時だと思つてるの？　3時よ。」

「関係ない。」

「…………あるわよ。」

「ツク。仕事も満足にこなせんとは、万死に値する。」

「ちょ、ちょっとー！　何、剣抜いてるのよーー！」

「私を満足させれない」コックなど不要だ。」

啞然のキュルケ。

「では、参る。」

「参るじゃないでしょ————！」

羽交い絞めにした後に、もうすぐ朝食が出来るから。  
絶対、満足するから。

と必死で説得するキュルケ。

「うう。」

舌打ち一つを残してまた会話へ戻る。

いつもして、コック一同の命はキュルケに救われた。

そして、朝。

クルルクルル。

そんな音がしたのを合図に、アルトリアが立ち上がる。

「ど、どいつたの？」

「朝食だ。」

「へ。あ、ああ。やうだつたわね。」

「ああ。満足できなかつたら……解つているな。」

そんな言葉を残して、颯爽と扉に向かって歩いていく。

その部屋に残されたキュルケがやつれて見えるのは、決して見間違ひでは無いだろう。

しかし、悲しいかな。

「何をしている。」

「まだ、何があるの？」

「案内しる。」

扉の前で振り返り、堂々と命令。

「そりよね。解らないわよね……。」

「当たり前だ。」

なんでそんなに堂々と叫ぶのかしら？

ボウっとした頭でそんな事を考える。ちなみに、使い魔であるサラマンダーは即効で眠っていた。

トボトボ。

擬音が聞こえるような歩調で歩くキュルケ。

アルトリアは随分先を行つてゐるから、もしかしたら催促されるかも。

そう思つて顔を上げたキュルケに、ピンクの髪が眼に入った。

「はーい。おはよう。ルイズ。」

声を掛けられたルイズは、苦虫をかみ殺したような表情をして返事を返す。

「おはよう。キュルケ。」

二人にとつては儀式のようなやり取りだが。  
それ故にルイズはキュルケの変化に気付いた。

「ちょっと。キュルケ、どうしたのよ？」

もの凄いクマと、なんて言つんだろ?  
魂が削られた感じ?

「え? ああ、ルイズどうしたの?」

お、おかしい!!

こんな、擦り切れたような微笑みと、慈母のような声色…!  
ツェルプストーがこんな!?  
何事?!

「え、ええと。大丈夫なの?」  
「ええ。……なんとかね。」  
「そ、そう。」

何があつたんだろう。

ルイズの心はそれに尽きた。

いつもならこっちを挑発していくのに、それもない。

昨日、召喚の儀があつたんだから使い魔の血魔でもしていくと思つたの。」

「あら。人間を使い魔にしたのね。」

「…………やつよ。」

扉から出でてくるサイトを見たキュルケは反射的に言葉を出したいた。

来た……

そう思つたが、キュルケの顔は微笑んでいる。

「平民みたいだけど。…………

よかつたわね。おめでとう。」

「へ？！　あ、ありがとう？」

?????????????????????

おかしい。

男に何か酷い事でもされたのかも知れない。

まあ、ツェルプストーにはいい薬でしょうけど。

キュルケには、こんな雰囲気似合わないわね。

実の所キュルケはルイズをからかう余裕もなかつた。

それに会話の中の沈黙で沢山の、そりゃ——————沢山の言葉を飲み込んだ。

ルイズがキュルケを訝しがり。

サイトは台詞が無いまでも、巨乳で美人、そして絶えず微笑みを宿しているキュルケに「か、かわいい。いや、美人って言つのかあれは。大和撫子？ それにしては服装が大胆すぎるか。」などと好印象を受けている中。

「キュルケ。」

そんな、声が聞こえた。

サイトは声から判断して、かなりの美人だろうと嬉々として振り返り。

ルイズは「どつかで聞いた事があるような？」と思案しながら振り返る。

キュルケは既に視界に入れていたので、諦めたように「……はい。」と返事を返した。

「案内をしろと言わなかつたか。」

「言されました。」

「なら何を道草をくつている。」

傲岸不遜。

その物言いにカチンとくる所があつたのか、無謀にも食つて掛かる者がいた。

「ちよつとあんた、こんな状態のキュルケに何言つてんのよ。どこ行くのか知らないけど、一人で行きなさいよね。大体、平民の癖に貴族を使うだなんて、貴女馬鹿なの？」

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールである。

その言葉に、サイトは良い所もあるんだな。そう感心した。

今まで、と言つても一晩だが犬だの奴隸だと、どんな人格破綻者なのかと疑つていたのだ。言葉の端々に気に入らない部分はあるけど、それでも、この偉そうな美人よりマシだらうと思いだしてい

た。

気が氣で無いのはキュルケだ。  
サアと血の氣が引いた。

ルイズがアルトリアをメイジでは無いと田屋をつけたのは、解る。  
マントを付けていないから。

それは良い。

今まで散々からかい倒してきた自分を心配してくれる。それは純粹に嬉しい。

だが、もつと穏やかに言つて欲しかつた。

リフレインするのは、「貴女馬鹿なの？」

馬鹿なの？

バカナの？

ばカナノ？

BAKANANO?

.....マズイわよ、ね？

「小娘、名は？」

「こ、小娘ですって！？」この平民の癖になんて無礼なのーー。

あら？

すぐさまバツサリ行くのかと思つたのに。  
それでも無いのね。

「名を聞いている。」

「あなたなんかに名乗る名前は無いわーー！　私の高貴な名前はね、

貴女みたいな無礼な輩には聞くだけでも敷居が高いのよ……」

額に手を乗せて天を仰ぐキュルケ。  
ルイズ。助けれなかつたらごめんなさい。  
もう、限界なの。

「おー。言つてる事はめちゃくちゃだけど、ちょっとカッコイイな。  
フ、フン。今頃解つても遅いのよ……」

「いい、度胸だ。小娘。」

底冷えのする冷たい声。

尤も、第一声からして、感情の籠つていらない声だったのだが。

「あ、あああ、あんた、知つてる？ わ、わたわた、私は公爵家の  
出なのよ？ どう言う意味か解るわよね？」

あー……もう勘弁してルイズ。

これからは、ゼロだなんていわないから。それ以上挑発しないで  
……。

「公爵家てなんすか？」

アルトリアの殺氣ならぬ不機嫌さを欠片も感じていないのか、ル  
イズは顔を真っ赤にさせながら危険な事を言い続け。  
その使い魔もまた危機察知能力が皆無なようだ。

「公爵家って言つるのは、貴族の階級の事よ。王族・公爵・侯爵・伯  
爵・子爵・男爵。王族が最高権力で、その後は順に権力が強いわ。

だから公爵って言うのは、かなりの権力を持つてるわね。」「

「へー。キュルケさんって博識なんですね。」

「一般常識」。

「あ、すみません。俺一こつちに来たばかりで何も知らないんですよ。」

「スミマセン。」

何時から私は、こんな説明約になつたのかしら……。

フフフ。と笑いながら戻るキルケ。

いたし、二ノが臺モサヘ一ノカニシレヤリカれレシヤリ

があるのか解つた物ではない思考を展開して いた。

「アーティスト」

「権力を持たねば何も出来ぬと言うのなら、貴様はこの先何もなす事は出来ないだろう。己に誇りが無く、吐く言葉に誠実さは皆無。貴様との会話は、なんの実りも無く、また貴様を斬るのは穢れた身の私と言えど嫌気がさす。」

卷之三

実際の所、アルトリアはお腹が減っていたのでさつさと朝食に行きたかつただけなのだ

「行くぞ。」

後ろで何やらブツブツ言っているルイズを放置して歩き出す。

「じゃーねルイズ。」

軽い言葉を返すが、心の内ではかなり安堵したキュルケであった。

そして、アルヴィーズの食堂。

そこでもアルトリアの唯我独尊さは凄まじかつた。

席が無いわね。

そうほやくキュルケに

ならば、作れば良い。

そう宣言。

その後、初めは「席を空けてもらえないか。」と話しかけたのだが、相手はアルトリアを貴族では無いと解ると、それを拒否。平民は平民らしく、床で食べればいいのでは？ 等と侮蔑の視線と共に言つてくるのだ。

そのセリフを言い終えると同じくして、その貴族は空を舞つた。アルトリアの拳が顎にヒットし。そのまま窓ガラスを破つてどこかに消えた。

「席が出来たようだな。」

「……そうね。」

斬られなかつただけマシね。

キュルケの思想はそんな物。

まわりもあまりの展開に言葉をなくしている。

キュルケの席はそこではなかつたのだが、アルトリアを一人で食事させると、周りがどうなるか解らず。朝から流血沙汰は勘弁して欲しいのもあって同席した。

そして、アルトリアの食べっぷりに食欲が失せた。テーブル一つ分の食事が瞬く間に消えていくのだ。どこに入っているのか興味が出るが、追求するほど命知らずでは無い。

「ふむ。」

「……何か、不満でもあつたかしら？」

「いや、なかなかの腕を持ったコックだらう。」

「じゃあ……もしかして、量が少ないとか？」

「もう2セット欲しいな。」

「…………そう。」

「味については、もう少し雑な方がより美味だ。」

「…………。」

「ふむ。そこのメイド。」

「え？ あ、はい。なんでしょう？」

「ゴック長は健在か？」

「は？ え、いえ、失礼しました。」

「健在か？」

「は、はい。今も奥で料理を……。」

「案内しろ。」

あれよ、あれよと言う内に厨房に。ちなみにキュルケも同道している。キュルケ自身は、これを気に離れよつと思つたのだが。

「貴様も着いて来い。」

と、理不尽な命令について頷いてしまつた。

「貴様がコック長か？」

「そうですが、料理に問題でもあつたので？」

「いや、素晴らしい料理だつた。」

「つ！ そりや、ありがたいですが。何のよつで？」

「一つ要望がある。」

「何でしよう？」

「もつと雑に作ってくれ。」

「は？」

「一度は言わん。」

マルトーの心情は複雑だつた。  
料理を褒められるのは嬉しい、だが、もつと雑に作れとはびづき  
う事か。

「それは、料理人にとってはなんとも複雑な要望で。貴族様には上  
品な食事は御口に合いませんでしたか？」

他の貴族が聞いたら激昂しそうなセリフだ。  
だが、アルトリアは貴族ではなく、またキュルケもそんなに言葉  
に乗るほど青くはない。

「私は貴族ではない。」

「「「は？」」「」

厨房のキュルケ意外の全員が声を漏らした。

「あれらが、貴族と言うのであれば、この世界の貴族など夜盗の群  
と大差ない。そんな連中と私を同列に見る事は許さん。」

「しかし、じゃあ、一体何なんだいあんたは。」

貴族では無いのなら、微妙に敬語では無い敬語を使う必要はない。

「私は騎士。私は使い魔。騎士は美德のみを欲し。使い魔はマスターの安否のみを案じる。穢れたこの身では、この言葉に誇りを持てぬが、それでもそつありたいと望む者。」

罪の無い人を斬殺そうとするのは美德に入ってるのかしら？  
そう思うキュルケだが、マルトーは貴族ではないと言つこの少女に少し興味が出た。

「ほつ。まあ、何やら複雑な事情がるみてーだな。」

「うむ。察せ。」

「ガツハツハ。察してやるよ。それで、雑にしきつてーのはじづ言うこいつた？」

「そうだな、説明しよう。」

そして、僅か10分で出来上がった物。

「あら、美味しいわね。」

「ふむ。キュルケ、貴様にはやはり良い物を見抜く眼力があるようだ。」

「どうも。」

「しかし、こりゃ偉く簡単に出来るもんだ。」

「挟んだだけだからな。」

「そりやそうだが。」

「キュルケ。」

「何？」

「マスターの好物を詰め込んだ物を5つ用意しろ。」

「私が、作るのかしら？」

「用意しろ。」

「……はい。」

しげしげ、と作った物を観察するマルトー。

「どうした？」

「いや、こりゃ一どじでも作れると思つてな。」

「つむ。肉と野菜を詰め込んだだけだからな。パンヒドレッシング  
さえどうにかなれば、どこでも製作可能だ。」

「しかし、あの譲ちゃんに任せていいいのかね？」

「キュルケの事か？」

「ああ。あの譲ちゃんは貴族だろ？」

「知らんな。仮に貴族だったとして、それがどうした。」

「アルトリアはまだ此方にもう少しだつて言つからな、貴族の恐ろ  
しさつて物を解つちやいねーんだ。」

「ぐだらん。」

「確かにアルトリアにしちゃ下らない事なのかもしかんがね。俺達  
にとつちや貴族なんて恐怖の対象でしかないんだ。あの譲ちゃんは  
何でか言つ事聞いてるが、他の奴らにあんな物言ひはしない方がい  
い。」

「ふむ。ならばこの世界、私が壊して見せよ。」

「ああ。そうしてく」……は？

「貴族だ平民だと下らん。すべてが平等などと言つのは夢想でしか  
ないが、これほどの落差はいらん。ならばその落差、私が壊してや  
る。」

「壊せねばいいんだがな。俺に若さがあればアルトリアについて  
つただろうが。この世界を壊すなんて流石に無理だな、魔法を使え  
るか使えないか。それがこの世界での真理だからな。」

「ぐだらん。私が法だ。」

「ガツハツハツハ。そこまで断言できりゃ、もしかしたら、やっつ  
まうかもしねーな。」

「無論だ。」

ちなみにこの会話を聞いているのは、食堂にいる一同とキュルケ。平民であるメイドや料理人達はアルトリアの不遜な物言いも好意的に受けているが、キュルケなどは、本当に気が気では無い。アルトリアの実力を全て知っているつもりはないが、それでもどんでもない使い手なのは承知している。

魔法をキャンセルするなど、先住魔法並に反則だ。それが、世界を壊すと断言。しかもアルトリアは、ヤルと言つたらヤル奴なのは、一晩で理解した。

タバサも、とんでもない使い魔を召喚したわね……。

そんな思考をしていても手は休まずにサラダを詰め込んでいく。

「ふむ。」「どうした?」「いやな。少々確認をしたい。」「なんのだ?」「同郷の者がいるやもしれんのではな。」「ほう。」「そこのメイド。」「はい。なんでしき?」「小娘の使い魔を呼んで来い。」「え? 小娘?」「ルイズよ。」

小娘で伝わるわけないでしょ。的確なキュルケの援護だった。

「あ、ヴァリエール様の。」

「あの程度の輩に尊称など不要だ。」

早くもアルトリアの言動に馴れたのか。  
呼びつけられたメイドは苦笑いしながらも退室していく。

そして、数分後。

「あのー、呼ばれて来たんですけど。なんですか？」

何故かビクビクしながら入ってくるサイト。

「良く来た。」

「あ。あんた、さつきの。」

「これをやろ。」

そう言つて手渡すのは、先ほど作つた料理。

「「」これは――――――」

「つむ。」

「おーーーっ！！！」「こちにもあつたのか！！！」

「無い。私が考案した。」

「へ？」

「アルトリア。この坊主が同郷なのかい？」

「いかにも、先ほどの発言で理解した。」

「なんか。随分アルトリアと差があるな。色々。」

「こちらに貴族と平民がいるのと変わらん。」

「そんなもんかね。」

「え？ ちょ！！ あんた、地球から来たのか！？」

「そうだ。」

「マジデ！？」

「そうだと言つていい。」

「うわーーーっ！！ 良かつたー俺一人だけかと思つてたからさ。いやー地球出身の人がいるってなんあｗせｄｒｆｔｇｙふじこー！」

！」

「つるさいわ。と言わんばかりに、アルトリアがまな板を投擲。見事に眉間にぶち当たり、サイトは氣絶した。あるいは死んでいるかもしれない。」

「迷惑をかけたな。」

「い、いや、そりや構わねーが。こりや死んでるんじゃないか？」

「それほど軟弱ではないだろう。」

「そうか。おい、隅によけとけ。」

「「「へーい」」

若い衆がサイトを調理場の邪魔にならない所に移動させていく。

「キュルケ。」

「ん？ 何？」

「まだ出来ないのか。」

「もう出来るわよ。」

「ならばさつさと包みに入れろ。」

「解つたわよ。」

キュルケとメイドの数人が出来た料理を紙の包みに入れていく。マルトーはそれを見ながら今更な事に思いあたつた。

「アルトリアよ。」

「なんだ。」

「あの料理の名前は何て言つんだ？」

「ハンバーガーだ。」

2話・呪われし微熱（後書き）

タバサでない…

### 3話・生誕の泡騒

「貴女ね。昨日も立ち寄ったんだから道順くらい覚えてなさいよ。」

キュルケは額に手を当てながら疲れたよつて呟く。

「何を言つている、食堂からの道順はいまだ知らん。憶測であればたどり着けるかもしけんが、それでは時間がかかりすぎる。」

その隣を歩きながら答えるアルトリア。

「あら、やついえば。それもやつね。」

「全く。貴公は乳に栄養が回つてまともな思考もできないのでわ？」

嘆かわしい。と頭を振る。

それに対してもキュルケは頬が引き攣つっている。

「あ、あのね、胸は関係ないでしょ？」「

「詳しく述べ知らんが、以前胸のデカイ者は頭が悪いこと聞いた、やはりそうなのかなと思ってな。」

やはりコンは博識だ。などと頷くアルトリア。

「リンicotて誰なのかしら？」

ヤロー燃やしきくす。

そんな事を思いながらのキュルケの言葉だった。

胸とは自分にとって誇るべき物なのだが、それを馬鹿にされる要

素にされたとあつては貴族の名折れだ。

「……以前のマスターの友だ。」

アルトリアは僅かに顔を顰めながらそう答える。

「へえ。」

僅かの沈黙と表情に何かを感じたのか、キュルケの返事はそれだけだった。

アルトリアの内情をキュルケは知らない。

一晩の付き合いしかないのだから当然と言えば当然だ。

それも、一方的に問いかけられる事しかなかつたのだから仕方ない。

キュルケの問いには「マスター以外に答えるつもりは無い。」と一刀両断されるのだ。

なかなか理不尽な話だが、キュルケもその辺はもう諦めている。

「……。」「

「ここだな。」「そうよ。」

あの後一人とも無言でここまで来た。

居心地の悪い雰囲気もさることながら、キュルケはこれ以上深入りしてはアルトリアの逆鱗に触れそうで戦々恐々としていたのだ。

「キュルケ、はんぱーがーはちゃんと持つていいだろうな?」

「当たり前でしょ。」

腕に下げたバスケットを持ち上げながら答えた。  
拳ほどの大きさの紙の包みが5つ。

アルトリアは満足気に頷き、扉に向き直り。

「マスター。御養生されているのは承知ですが、拝顔したく参じました。」

そんな事を言った。

それに驚いたのはキュルケだ。

傲岸不遜・大胆不敵・唯我独尊などの言葉が似合つこの騎士が、  
こんな丁寧な言葉使いをするなどと想像もしていなかつた。

「は、はに！？ 誰よ貴女！？」

その言葉にアルトリアは眉を寄せキュルケを一瞥する。

その顔には「この牛乳ウゼー。」そんな感じの言葉が隠れています。  
ように見えないことも無い。

よつはいらん事言つな。といいたいらしい。

「……だまれ。」

むしろ声に出していた。

「……はい。」

キュルケも肩を落としながらその言葉に素直に従つ。  
アルトリアによるキュルケの調教は順調に進んでいた。

「…………。」

「…………。」

「…………。」

「…………まだ寝てるのかしら?」

30秒ほど経過した所でキュルケがぽつりと言葉をもらす。

「いや。この気配はすでに『起床』されているだらう。」

「『起床つて……』って、やつぱりいいわ。」

キュルケは、どうしてもアルトリアの丁寧な口調が不気味だった。だが、今はそれよりも親友の事が気がかりだった。  
過去類を見ない従者の召喚と、その契約による魔力の大量消費での気絶。

どちらも前代未聞な事だった。  
心配するなど言つ方が無理だ。

「返事待たなくともいいんじゃないかしら?」

「馬鹿な。そのような無作法出来るはずが無いだろ?」

「…………。」

「…………。」

「貴女がそんな事言つの…………。」

「なにか?」

「いいえ。なんでもないわ。」

何いつてんだこの無礼な牛乳は。そんな表情で見つめられ、キュルケは大いに不満だつた。

もつともキュルケも、無礼云々で言つなら貴女は不敬罪で100回死ねるでしょ? この世に貴女を殺せる存在がいたとしたらだけどね。そんな事をおもっていた。

そんな二人の睨み合いは数十秒続き、扉の開く音で打ち切られた。

キイ。

そんな古めかしい音を立てて医務しつの扉が開く。  
そこから出でくるのはタバサ。

その姿にキュルケは安堵したが、タバサの様子がおかしい事に気付いた。

寝ぼけているのか、どこか目の中の焦点が合っておらず、体も左右にフラフラと揺れていた。

その様子にアルトリアもまた訝しげに口のマスターを見ていた。

「如何されたのですマスター？」

その声に反応したのか、タバサがアルトリアを捉える。ジッと見詰め合う両者。

数秒の後、タバサの顔色が真っ青になり、口を開いた。

「貴女は……アーサー王？」

アーサー王。

それはキュルケにとつて全く聞き覚えの無い王の名前だった。  
歴代の王を全て知っているとは言わないが、それでも王と言うからには名が残っている物だ。

それに、この質問はキュルケに対してもではなく、100%アルトリアに対するものだ。

「はい？」

唐突な上に意味が解らず、キュルケから間抜けな声が漏れた。

首を捻りながら隣のアルトリアを伺うキュルケ。

「既に情報の共有が始まっているのですか？」

「こちらもまたキュルケにとって訳の解らない問い合わせだつた。記憶の共有とは一体なんなのか。

使い魔を召喚してそのような副作用が出る事など聞いた事がない。

「解らない。でも、貴女に良く似た人の夢を見た。」

「まだ真っ青な顔でタバサは答える。

「ふむ。それは私でしょう。」

淡々と答えるアルトリア。

それを聞いた瞬間、タバサの顔は青を通り越して土氣色になつた。

「じ、じゃあ。貴女はゆ、幽霊？」

上擦つた声。

身の丈を超える杖を握り締めて問う。

「いえ、それは違います。私は正式には死んでおりません。マスターの見た夢は確かに私の辿つた道ではあります、それは私であつて私ではないのです。私は未だあの丘で死を待つ存在です。」

ツホと安堵の息を付くタバサ。

しかし、それもすぐさま眉を寄せた思案顔に変わる。

「でも、夢では死んでた。」

「……どうに?」

アルトリアにとつて、その事実は知らぬ物だつた。願いを叶えた記憶は無く。死んだ記憶も無い。

尤も、今のアルトリアにとつての願いは清廉だつた頃とは全く別の物になつてゐる。

「剣を返還し、長髪の騎士に見守られて、死んだ。」

「つな!…」

その言葉にアルトリアは目を見開いた。

剣を返還。それは不老の呪縛を解いたと言つ事。それは王の責務を手放したと言う事だ。

【約束された勝利の剣】があつたからこそアルトリアは王として在つたのだから。

それを返還すると言つ事は国の終わりを意味する。

清廉な己が、国の終わりを選択できるとは思えなかつた。自分の死後を賭けてまで守りつとした祖国だ。

それを、受け入れた?

有り得ない。今の自分なら出来る、あの最期は相応しい物であつたと、受け入れる事が。だが、あの清廉を絵に描いたような自分には到底理解しえない物だつたはずだ。

だが、タバサの夢では既にアーサーと言つ王は死んでいる。ここに、存在しているというのに。

「あら、貴女幽霊だつたの?」

キュルケの半ばボケた問いかにも反応出来ない程アルトリアは困惑していた。

「む。幽靈じゃないって言つた。」

問いかえるのはタバサだった。

もつともそれは、幽靈ではないと信じたいが為の反論だったが。

「でもタバサの夢では死んでたんでしょう?」

「うん。」

「まあ、夢で死んでたから幽靈って言うのはどうにも可笑しな話だけど、本人も認めてるしね。」

「でも、幽靈じゃない。」

「そうでしょうね。幽靈じゃないって言つのは同意するわよ。あんなに暴飲暴食する幽靈なんてふざけてるしね。」

「暴飲暴食?」

「ええ。そりやもう凄かつたわよ? テーブル一つ分の食事が瞬く間に無くなるんだから。それにハルケギニアの事も全く知らないらしいから、徹夜で説明とかしてたしね。あんな幽靈がいたらたまらないわ。」

「?」

「テラソと首を傾げるタバサ。

「ああ。タバサが倒れちゃったから私がもうもうの世話を見てたのよ。」

タバサに微笑み答える。

「ありがと。」

「いいわよ。親友、でしょ?」

ウインクしながらタバサに微笑むキュルケ。

それにタバサは一瞬きょとんとした表情をしたが、次の瞬間ほのかに赤くなり、はにかむ笑みを返す。

「ありがとう。」「どういたしまして。」

キュルケは幾分柔らかくなつたタバサの表情がうれしかつた。何故こうなつたのか解らないが、それでも一人の間にあつた壁がより薄くなつたように思つ。

「タバサの夢に関しては当人が認めてるけど、いつもやつて存在しちゃつてるし、王様だつたつて言つのはなんだか納得しないでもないんだけど。そうね、もう別人なんじやないかしら？」

「別人？」

「ええ。だつてね、アルトリアの話を聞いてると異世界から来たみたいだから。」

「本当？」

タバサにとつては寝耳に水だ。

夢で知つたアルトリアは、確かに別の土地の王としてあつたよう

に思う。

アルトリアの治めた国はブリテン。

しかし、タバサの知る限りそのような国はしらない、よつて【ロバ・アル・カリイエ】の王かとも思つたのだが、まさか異世界とは思わなかつた。

「ええ。聞けば聞くほど世界が違うわよ。」

それに、なんでか物凄い暴君だしね。

そう続けようとしたキュルケだが、それはアルトリアの声に阻ま

れた。

「まさかっ！……」

それは、困惑を多いに含んだ叫びだった。

「ん？　どうしたのよ？」

「？」

首を傾げるタバサと、変な物でも見るかのようにアルトリアを見るキュルケ。

「いや、まさか。そんな事が……。」

ブツブツと何かを呟くアルトリア。

訝しげにキュルケとタバサが見守る。

数瞬置いて、アルトリアの腕がキュルケのバスケットに伸びた。

「え？　ちょ。貴女ね、真剣に悩んでると思つたら、何行き成り食  
い意地出してるの……！」

「馬鹿者！！　誰がハンバーガーを寄こせといつたのか！！　いや、  
くれると言うのなら答かでは無いが……いや、今はそれ所ではない、  
ナイフが入っているでしょう。」

「は？　まあ、入ってるけど。」

「よこせ。」

「解ったわよ。」

「はんぱーがー？」

「ああ、マスターその話はまた後ほど、火急に確かめたい事があり  
ます。」

「クンと頷くタバサ。

そしてバスケットを守るように半身になっていたキルケからナイフが差し出される。

「こんな物どうするのよ?」

差し出されたナイフを受け取り、逆手に持つアルトリア。タバサも興味津々でアルトリアを眺める。次の瞬間。

トス。

そんな軽い音を立て、ナイフがアルトリアの手を貫いた。唚然としたキルケとタバサ。

それを意にかいする事もせず、アルトリアは無表情で手の甲を見つめていた。

傷からは紅い血が滴り、ナイフは確実に貫通していた。そう、なんの魔力も籠っていないナイフが、アルトリアの肉体を傷つけたのである。

「なるほど。」

どこか寂しげに、また楽しげなアルトリアの声。

それに突き動かされるかのようにキルケとタバサの思考が回りだした。

「ちょっとー! いきなり何してるのー!」「なぜ…。」

二人が傷を確認しようとやってくる。

アルトリアは、それを一瞥しナイフを抜き取る。ついで、手の甲の血を舐め取り、眉をゆがめる。

「近づくな。」

怒氣や殺氣などは無い。

しかし、有無を言わせぬアルトリアの声。アルトリアに従う事を無自覚に受け入れているキュルケは、傷口に伸ばそうとしていた手を止める。

タバサとしては自分の使い魔が自傷癖でも持つていいのかと驚いていた。

「近づくな」との忠告もタバサは聞いていたが、その意味が解らず治療を施す為にアルトリアの手を取った。

「…………」

ビクンッ。

タバサの体が跳ねるように震える。

「はあ。私のマスターとなる者は皆、私の言つ事を聞いてくれないのですか……。」

どこか嬉しげな音を含んだ声。

しかし、タバサは聞こえていなかった。

アルトリアの血に触れた瞬間。タバサの中に流れ込んでくる何か。それは意思と言うのか、タバサには何と形容したらいいのか解らなかつた。

ただ解ることは、その何かは途轍もなく危険、そして当方も無く醜悪であった。

「全く。」

タバサの肩を押し自分から離す。

タバサの目は焦点があつていなか、亡羊とした感が見える。

「キュルケ。」

「何?」

「マスターの手に付着した私の血液を洗い流せ。その際、絶対に私の血には触れるな。」

「???? 解つたわ。」

キュルケは困惑したようだが、自失したタバサの手を引いて消えていく。

それを見送り、アルトリアは半ば呆然と手を眺める。

「ふふ。受肉ではなく、生誕ですか。」

自嘲するかのように晒す。

なんと言う事はない。

ただ、捨てられただけ。

アーサーと言う英靈の座から放逐されただけだった。

いや、だけでは無い。この呪われた身のままに生きよど、そう言われたのだ。自分の願いを託した世界から。

それは何と言う皮肉だろう。

この身は穢れている。内包するは極大の呪い。生きよどと、この身は生きているだけで、どんな災禍を振りまくか計り知れない。現に先ほどのマスターは血に触れただけで酔つていた。

【この世全ての悪】と言う呪いの渦に。

ああ、だが。

この溢れる高揚感はなんだ?

叫びたくなるような。

抱しめたくなるような。

それこそ、高笑いをしたくなるような。

この感情はなんだ。

これは嬉しいのか？ それとも悲しいのか？

だが、チャンスを得た事は確か。

もう一度この身を生かすことが出来る。

長年連れ添つた愛剣エクスカリバーが在り。風の加護もまたこの身に在る。

竜の血は私と言う存在を認めるかのように脈動を繰り返し、この身に魔力を溢れさせている。

ああ、これは この万能感は。

王に就いた当初感じていた、私に出来ぬことなど何もない。そう思えるほどの開放感。

「ふふ。あははははは！－ そつか！－ 生きよと言つのであれば私は生きよう！－ 世界よ！－ この私にもつ一度人生をくれると言つのであれば、私は私の為に生きよう！－」

廊下から見える太陽を振り仰ぎ、紅い竜の咆哮が世界に木靈する。傷口は膨大な魔力の恩恵でもつて癒され、乱舞する魔力の渦は黒い風となつて血を舞い上げる。

この世界に、【王】と書ひ名の枷から解き放たれた一匹の竜が舞い踊る。



### 3話・生誕の泡時（後書き）

いや。申し訳ないです。  
むちゅくちゃ更新遅れました。  
流石に年末はきつい。  
過労死するかと思いました。

キュルケは魔法学院の教室、その中段に当る席に腰掛けて自分の隣に座る主従を眺めていた。

タバサとアルトリアである。

この騎士は一体何なのか。それがキュルケの思考の全てだった。いつもならキュルケの周りに侍つていてる男達は昨日アルトリアに斬り伏せられ、キュルケの周りには誰もいない。それが思考を深めるのに一役買つていた。

あの医務室でのやり取りの後、タバサの気分が優れずアルトリアの指示に従つて付着した血液を洗い流したのだが、その血を洗い流した後になんともタバサの顔色は優れなかつた。

優れない所か、タバサは吐いた。

亡羊とした視線が点を結んだ瞬間、タバサの体が震えたかと思うと、突然吐きだしたのだ。

それは長く続き、胃液しかでなくなつた状態でも尚吐きしづけた。その尋常ならざる状態にキュルケは何もできず、ただ背を撫で付ける事しか出来なかつた。

原因は一人にも解つていた。

尤も、大本の原因を一人が理解していたわけではない。

ただアルトリアの血に接触したが為の症状だと、そう思つていた。そもそも、アルトリアの血にナニが含まれているかなど、この世の誰にも解りはしない。

タバサはただ良くない物だと思い。

キュルケは、触れてさえいないのだから、血液になにか秘密があるのだろうと思つ程度。

タバサの状態が治まつた所で一人してアルトリアの元へと戻つた。そもそも、何故こんな状態になつたのか疑問を解消するために。しかし、戻つた末に見たモノは、一人にして戦慄を覚えるような状態のアルトリアだつた。

先に見た黒いドレスは無く。

その身に黒い騎士甲冑を纏い、太陽を睨みつけるその顔にはバイザーのような物を付けた姿。

手に握られた、邪剣とも見える禍々しい剣。

それは召喚した当初の姿だつた。

ただ、違うのはその身から溢れる魔力の形。

目視出来る程の黒い魔力を縦横無尽に撒き散らし、そしてそれは渦を巻き黒々とした風を生み出していた。

風は壁を抉り<sup>えぐ</sup>、地面を削り、屋根を貫いていた。

その姿をどう形容するかは個人によるだろう。

それはタバサにとつて途方も無い力の具現として見えた。

それはキュルケにとつて途轍もなく邪悪な存在に見えた。

魔力の放出に呼応するように脈打つ赤い文様は、それ自体が生きているかのようで生理的嫌悪感を助長する。

いや、嫌悪と言うよりも恐れ。

目の前にいるのは何なのか解らない。そこからくる嫌悪と恐れ。

それだけは一人の共通した認識だつた。

二人は何時間そうして眺めていたのか、あるいはそれは数瞬だったのかかもしれない。

だが、幾許かの時間が経ち。アルトリアの狂態も形を潜めた頃、キュルケが口を開いた。

「貴女…………何なの？」

震える声を隠す事も無くキュルケは問うた。

昨夜と今朝のやり取りでそれほど悪い存在ではない、そう認識し

ていたキュルケをして恐れを抱かせていた。

強大すぎるほどの魔力の保有量。魔法をキャンセルしてみせた異常なスキル。一瞬でメイジ一人を無力化させる事のできる技。どれを取つてみても異常。

「使い魔としてみるなら、それは伝説に謳われた始祖のそれを上回るほどのスペックだろう。

千人どころではない。何万人メイジを集めた所で目の前の騎士に太刀打ちできるとは思えない。

キュルケは今更ながらに、その異常性の数々に目を向けた。

### 「シャルロットの騎士」

二人の存在には気付いていたのか、アルトリアは太陽を睨みつける体勢はそのままに答えた。

その答えに眉を寄せるキュルケ。

そして、ピクリと肩を揺らし俯くタバサ。

「シャルロット？」

「そうだ」

「それってタバサの事よね」

キュルケはチラッとタバサを見ながら問う。

タバサは俯きながらもアルトリアを睨んでいた。

「ああ。そうでした。名を偽つておられたのでしたね」

ムツとしたのか、タバサは「解つてたなら合わせろ」とでも言いたげに杖を振った。

それはアルトリアの頭に当り、コシンと音を立てた。  
その行為はキュルケを啞然とさせた。

「何をするのです」

「お仕置き。解つてたなら黙つて欲しかった」

アルトリアは小突かれた箇所に手を当て、身に纏つた鎧と剣を解かしながらジト目でタバサに問う。

それにタバサは答える。

「む。確かに私が迂闊でした」

「次からは気を付けて欲しい」

ふむ。とアルトリアは口元に手を当て考える仕草をとった。

「私も先ほどは気が緩んでいたので、今後このような事はないでしょう」「ん」

タバサは「クリ」と頷く。

「何故、気が緩んでたの?」

「いえ、この身の栄転は果たしてどのような生になるのかと、思いを巡らしていました。その所為ですね」

「栄転?」

「ええ。意味は解りますね?」

「以前より良い立場になる?」

「クリと頷き答える。

「その通りです。シャルロットはもう……ハア、マスターはもう知っているかと思いますが、この身は死を約束されていました。故

に何を成そうともそれは私に還つて来る事は無く、何も生み出せぬがこの身に課せられた運命でもあつたのです」

途中、名を読んだ時にコツリと杖で打たれながらも身の上を語る。その話に全て理解出来なかつたのか、タバサは考え込むように顔を俯かせる。

「それは逃れる事の出来ない、そう、呪いのような物でした。しかし、私はどうやらこの世に生を受けたようなのです。以前の私はほとんど死者でした、故になにも残すことが出来ず、何も成せない。それが私だつたのですが、生あるこの身は世に何かを残す事が出来る、何かを成す事が出来るのです」

それが破壊か誕生かはわかりませんが。そう続く言葉にタバサは少しだけ驚いた。

選択と言うのは大抵にして3つある。簡単な例にしてみれば、進むか引くか、それとも立ち止まるか。

この騎士の生き様からして、立ち止まる事も引く事も頭には無い。ただ、タバサは進む事に誕生が適當する事に驚いていた。

この騎士はあれだけの裏切りを目の当たりにしても、進むことで誕生を見出している。

タバサは、その姿を見て、嘗て彼女が王として在つた時と寸分変わりなく気高く見えた。

ただ前を見据え。

そこに破滅があつたとしても、その先に笑っている人がいるから戦う。

その在り方は何だつたか、タバサは考える。

「どうしたのです？」

思案するかのように俯いたかと思えば、キラキラとした眼でアルトリアを見据え。しかしすぐにまた思考に没頭するかのように俯く。タバサの百面相を気にしたアルトリアが声をかける。

タバサは声に反応したのか、顔を上げアルトリアを見つめる。

「もう少しだったのに」

「何がでしよう?」

「…なんでも無い」

ならば、気にしません。そう言い置いてアルトリアはキュルケを見る。

二人と少し離れた場所に佇むキュルケ。

顔には困惑。

体には恐怖と逃避。

心も体もアルトリアに対する警戒か恐れかが見て取れた。

それにアルトリアは溜息をつく。

あの姿を見たのであれば魔術師なら発狂しかねない程に嫉妬するだろう。あるいは良い実験体が入つたと狂氣するか。

キュルケの反応一つ。それだけで、本当にこの世界は違うのだとアルトリアは実感する。

昨夜に解つた事ではあつたが、アルトリアにとつてはやはり別世界と言うのは馴染みの無い物だ。

アルトリアにはとつては別段問題の無い事もあるのだが……。

それに、以前の世界の魔術師の反応が異常なのであつて、キュルケの反応は至極まつとうだとアルトリアは考えていた。

アルトリアとしては、魔力放出を見たタバサの反応如何で今後の予定を決めるつもりだったのだが、現状維持かそれよりも好転する事が出来ると解つて安堵していた。

一方キュルケは、普通に、いや、それ以上にアルトリアに接するにタバサの姿に驚嘆していた。

あれほどの力の発露を見た後で、何故それほど普通に接することが出来るのか。

そもそもこの二人は契約時を除けば、ほぼ初対面であるのだ。

それが、何故これほどの信頼とも言える絆で結ばれているのか。

「マスターの対応が不満か？ キュルケ」

ビクツと体を揺らし、キュルケは声の方に視線を向ける。

「正直に言えば……ね」

苦々しい声色で返すキュルケ。

アルトリアは不満な顔一つせずに見返す。

「大した理由ではない。ただ、マスターは私がある程度ではあるが、知る機会を得た。しかしキュルケ。そなたは私の事を何も知らない。それだけの差だ」

それでは、全く関わりの無かつたタバサが何故。  
そう思うのはキュルケにして当然の疑問だった。

本人が認めたとは言え、タバサが知るそれは夢だ。キュルケは夢を見ただけで、あのタバサとこれほどの関係を築けるとは思えなかつた。

「ふざけないで。タバサに何かしたんじやないでしょうね？」

あれほどの魔力を保有している、それに加えアルトリアは異界の者。

キュルケとしては、洗脳の魔法でも使われたんじゃないかと思つていた。

「私を愚弄するのは止めておけ。折角繋ぎとめた命、一瞬で散らしてくはないだろ?」

アルトリアの目がスッと細まる。

殺氣も何もないが、それでもキュルケは体が震えようとするのを感じた。

それもアルトリアは幾千の戦場を駆けた英靈。  
その眼力は、それだけで他と一線を臥する。  
しかし、それも長くは続かなかつた。

「コツリ

音の原因は言わずも解るだろ?が、タバサ。

「ダメ」  
「しかし、」  
「ダメ。彼女は私の友達、だから」  
「……ぬう」  
「ダメ」

「はあ。解りました。以降は無礼な物言いにもある程度は耐えましょ。」

それにタバサはコクリと頷き返す。  
次いでキュルケに向直り。

「私は何もされてない」

はつきりと、そう断言する。

タバサ自身、魔法によつて思考を操作されたつもりは無い。

タバサはアルトリアを完璧に理解した訳ではない、それでもアルトリアは穢れても深い所はなんの穢れも無いと、そう思つたから信<sup>用</sup>したに過ぎないのだ。

「本当でしょうね？」

キュルケはそれを聞いても、不審気に問いかける。

それに対しても青筋が出来るのはアルトリアとしては当然で、マスターの静止の言葉がなかつたらすぐさま斬り捨てる所だ。

タバサは、ピクピク腕が震えているアルトリアを手で押し留め、コクリと頷く。

「ふう。ならないんだけどね」

額に手をあて、気ダルげな応答。

ピクピクと震えながら耐えているアルトリアは一種滑稽にも見える。

「まあ、いいわ。もう時間も相当立つてゐしそう授業にいきましょうか」

タバサはコクリと頷く。

この瞬間、アルトリアの血に関しての疑問は一人の中に欠片も存在していなかつた。  
それよりも衝撃的な者を目の当たりにし、頭の中から消滅していった。

「ツク。……ああ、ならばキュルケ、マスターにハンバーガーを

アルトリアは、何かを耐え切ったかのような苦悶の声を発した後、キュルケにそういった。

タバサは興味深げにキュルケを見つめ。

「ん？ ああ、そう言えば忘れてたわ」

キュルケは本当に忘れていたのか、あの変事にも取り落とさなかつたバスケットに目を向ける。

「ゴソゴソとバスケットに手を突っ込み、拳大の包みを取り出す。

「はい」

「コツと自分で伸びてきた手にタバサは疑問顔を向ける。

「なに？」

「ハンバーガーって言つ、んー。簡易料理かしら？」

「??」

「携帯食とでも覚えていなさい。」

アルトリアの言葉にコクンと頷き、タバサは包みを受け取る。

「どうやって食べるの？」

「この場合はどうなの？ ナイフも無いし、手づかみかしら？」

「当たり前だろ？ 私は厨房でもそのように食べていたはずだが？」

「ああ、あれは凄くマナーがなつてないと思ってたけど、あれで良かつたのね？」

「き、貴様……」

フルフルと震え、今にもエクスカリバーを顯現させそうになつて

いた。

それにはキュルケも少しビビッタ。

「あ、『ゴメンなさい』。でもあれが普通だなんて思わないわよ」

キュルケは、すぐさま謝罪する。

「つ。少しばか葉に気を使え。私もそれほど寛大なわけではない」

知ってるわよ。

とは、さすがのキュークエも言葉には出さなかつた。

すでにアルトリアは一杯一杯つぽかつたからだ。

そんなやり取りとしている間にタバサはハンバーガーの包みをはがし、食事に入っていた。

タバサ自身お腹がすいていた。  
そして一口食し、一言。

「……おいしい」

それに反応したのか、キュルケはタバサを眺め少しだけ頬を綻ばせる。

「そう」

タバサは「クリ」と頷きさらに食べ始める。

その姿を少し観察したキュルケは、タバサを促しながら教室に移動を始める。

「ふむ。マスターの口にも合つたようだな」

「そうね。それにアレにはタバサの好物も入ってるもの」

タバサの脇を歩きながら満足気に主人を眺めているアルトリア。

「ほつ」

キュルケの言葉に興味を持つたのか、視線がキュルケに移る。

「なんなのだ？」

「ハシバミ草よ

頬杖を突きながらそれを眺めるキュルケは、アルトリアについての考察を一旦打ち切った。

考えてもわからないのだ。

キュルケは決して頭が悪い部類ではない、むしろ逆。彼女は頭が良く回転も悪くないのだ。知識的には足りない所も多々あるだろうが、それでもこの教室にいる有象無象にくらべれば抜群に頭の回転は速い。

それでも、アルトリアに関しては全くなんの解答も見出せない。彼女は一体何者なのか？

タバサの言葉で言うのなら、異界の王。アルトリアの言葉で言うのであれば、元死人の転生者。そんな荒唐無稽の話を信じろと言われ、信じる者が一体何人いるだろう。

キュルケはその言葉を半信半疑ながら信じている。

あの異常な技の数々はこの世界には存在し得ない物ばかり、何より親友の言葉でもある。

解答らしい解答は出ない。

考えを打ち切った所で、最下にある扉が開く。

カラカラと音がなり、一人の教員が姿を現す。

教師はユツタリとした速度で歩き、教卓の前で止まると教室を見回し、微笑んだ。

「皆さん。春の使い魔召喚は大成功のようですね。このシュヴルーズ、この春の新学期に、様々な使い魔を見るのが大変楽しみなのでですよ」

確かに、今の教室は壯觀である。  
多種多様な使い魔で溢れている。

色濃く属性を司る使い魔、そしてその力量に合わせた種族。攻撃的な者から補助に徹する為の者など様々だ。

キュルケの足元に侍っているサラマンダーもまた火の代名詞的な存在である。

だが、しかし。

その中にあつてただ二組だけ、その条理を外れた存在がいる。

一つは、

「あら、ミス・ヴァリエールは変わった使い魔を召喚したのですね」

ふんわりと微笑み、興味深げにソノ使い魔を眺める。  
声をかけられ、ルイズは僅かに視線を逸らした。

「ゼロのルイズ！！ 使い魔を召喚できなかつたからつて、その辺の平民を連れて来るなよな！！」

あきらかに嘲笑を含んだ声があがり、そしてそれが他の生徒に火をつけたのか晒い声が連鎖していった。  
ルイズもまたそれに耐えかねたのか桃色の髪を揺らして立ち上がつた。

「違うわ！！ ちゃんと召喚したのにコイツが来たのよ！！」

「あはは！！ ウソつくな！！ ゼロのルイズのゼロは魔法成功確率０のゼロだろ！！ 皆知ってる事だ！！」

子供には似つかわしくない嘲笑が教室に伝播していく。

だが、笑わない者もまた少なからずいた。

それはキュルケ・タバサを筆頭に世の裏の部分を少しでも知つてゐる者達だった。

貴族として生き、学園に通いながらも、泥を被り、血を浴びた事

がある者達。

彼等は笑いもせずにサイトをジッと注視していた。

それは一重にアルトリアの存在があつたが為だ。

同じ人型の使い魔。

多くの者にとつての共通点は、ただそれだけ。

それだけでも注意するには大きすぎる共通点だった。

使い魔として召喚されるものは殆どが獣系なのである。

だが、キュルケにとつてはまた違う、上記のそれだけではなく、サイトがアルトリアの同郷の者だと知っているからだ。

「あの使い魔も貴女みたいな事が出来るの？」

何が起こったのか解らないが、呆然とタバサを眺めているアルトリアに声をかけた。

「ツク。私の分も……ん……なんだ？」

ハア。

額に手を当てながらキュルケは何度目か解らない溜息をついた。

「彼にも貴女と同じようなスキルがあるの？」

サイトを指差しながら聞く。

「ふむ」

それに釣られてアルトリアがサイトを眺める。

タバサも興味が引かれたのか、最期のハンバーガーを制圧し、指に付いたドレッシングをチロチロ舐めながらサイトに視線を送る。

「優秀な魔術師であれば、或いは

「ああ。あちらのメイジね」

「ああ」

「マーリン?」

「いえ、あれは優秀ではありますが、魔術師とは本来そのような変態ではありません。優秀な魔術師はもつと……」

そこで言葉を切り、アルトリアは苦い顔をした。

「どうしたの?」

「いえ。優秀な魔術師はすべからく、その、変人だったと思い出しました。」

土郎も凜もどこか可笑しかった…。

ボソッと呟かれた言葉にタバサはキヨトンとした顔をかえした。

「誰?」

「以前のマスターとその友人です。そこは夢に出て来なかつたのですか?」

タバサはコクリと頷ぐ。

「ならばその内見る事になるでしょう。貫く事の強さを、そして選ぶ事の残酷さを、何より人の可能性の膨大さを」

どこか夢みるように、諭すようにアルトリアは真剣に言つ。

「それは、「そんな事より、あの子はどうなの?」……む」

タバサの言葉を中断するようにキュルケが言葉を被せた。

キュルケとしては別段悪気があつた訳ではないのだが、結果としてタバサの言葉をぶつた切つてしまつただけなのである。

「アレは今は唯人に過ぎない。私と同レベルのスキルの行使を可能としたのであれば、そうだな、一度死んでみるしか無いだろ?」

もちろん、ただ死んだだけでアルトリアと同等の技術は手に入るわけが無い。

可能性としての話なのだが、一人の少女メイジにして一度死んだくらいでアルトリアと同じ領域に登れるとは思えなかつた。

「死んだだけで貴女と同じくらいになれるなんて、とても思えないのだけど」

追従するようにタバサも頷き返す。

「ただ死んだだけでは不可能だろうが、英靈としてその籍に就く事が可能なほどの殺戮を繰り返し、そこに登る過程によつては或いは私を超える何者かになる事もあるだろ? 尤も可能性の話でしかないがな」

それだけだ。

そう言い興味が失せたのか教卓に登る教師に視線をむける。

「……殺戮、それに英靈ね。」

キュルケはいまだに測りきれないのか、視線はサイトに向けられたままだ。

そして思う。無理だろ? と。あの少年にアルトリアと同じ領域に登り詰めるのは不可能だろ? と。

人を殺した事もなさそつた少年。

どんな経緯があろうとも、あの少年は英雄になんてなれそうにない。

それがキュルケの率直な感想だつた。

「……」

タバサにとつてアルトリアは憧憬の対象だった。

それは圧倒的な力に対する憧れだつた。

あれほどの力があれば……。

そう思つてしまつのは、当然の事だらう。

誰が見ても圧倒的だと、アレには適わないと、そう言えるだけの力を秘めた存在。

自分の使い魔と言つのは正直な所、実感が湧かなかつた。「メイジの力量を見るなら使い魔を見よ」との言葉もある。

アルトリアは到底自分に見合つた使い魔だとは思えなかつた。

これが他のワイバーン等であれば自分も納得できた。風をメインに使う自分に適した使い魔だと。

だが、アルトリアの本領は恐らく剣。風とは関係の無い物だ。むしろメイジと無関係の物だとも言える。

ともあれだ、それほどの力の持ち主になる可能性の有る少年。興味は無いが注意しておくれに越したことは無いだらう。

「全く、同じ学園に籍を置く者同士で罵り合つなど、それほど愚かな事はありません。貴方達はそのまま授業を受けなさい」

二人の思考を遮るように、どこか立腹した感のある声が響いた。みれば、ルイズと先ほどつるさかつた生徒の口に粘土が見える。つるをくて口をふさがれたのだらう。

「それでは、授業を、…………あら、ミス・タバサ、使い魔はどうしたのです？」

純粹に疑問に思つたのか、本当に不思議そうな声だつた。

だが、その一声で教室は静まり返つた。

それを不思議そうにしているのは、シユブルーズとその他の少數のメイジだけである。

シユヴルーズも彼等は単純に知らなかつたのだ。

シユヴルーズは担当の教師ではないと言う理由から。

アルトリアを知らない生徒一同は、自分の使い魔を召喚し、さつさと教室に戻つた者達だつた。

「……ん」

タバサが視線をやり、アルトリアは教師に向き直る。

「私が……マスター・タバサの使い魔、アルトリア・ペンドラゴンだ」

名前を呼ぶ所で少し躊躇したが、自身がそうだと告げた。

「あら。今回の召喚の儀は本当に、珍しい使い魔が現れたようですね」

ふふふ。と本当に嬉しそうに微笑む。

「ハ、ハハハ。雪風と言えど、使い魔がそれでは主人の力量が知れると言う物だね」

それに水を差したのは、名も無い生徒A。

彼は、自身の使い魔を召喚した後、そつそつと教室に引き上げていた者の一人だった。

実力はラインと生徒にしては中々使える方ではあるが、それ以上に自尊心が高く。自分よりも強い者を貶める事にある種の快感を見出す者だった。

考えるまでも無くタバサの実力は彼よりも上、メイジとしてのランクでも負けていて雑学でも魔学でも負けている。

ゼロのレイズと同じ人型の使い魔を召喚したと聞いた時点で、彼はタバサを貶める気マンマンなのであった。

「ゼロと同じで、平民でも連れてきたのだろうけど、君ほどのメイジが召喚に失敗するとは、風聞も当てにならない物だね」

軽薄そうな笑みを貼り付け、生徒Aはタバサを罵る。

しかし、生徒Aは教室に立ち込める雰囲気に眉を寄せた。自分と同じでタバサを気に入らないと思っている生徒は沢山いたはずなのに、誰も追従してこない。

笑い声も無い。

それどころか自分の周辺に座っている生徒は顔色が悪い。可笑しいと思い、周りを見回してみると、皆一様に顔色が悪く、大半の者が自分をどこか恐ろしいものでも見るかのように見ている。さらに眉間に皺をよせ、タバサを見て生徒Aは憤慨した。哀れな者を見るかのような。可愛そうな者を見るかのような。そんな目があった。

「ツツ……貴様ツ……僕に向かって、その目を向けるな……  
汚らわしい……」

その声は広い教室に響いた。

タバサは尚も馬鹿を見るかのようなジッヒと見つめ、そして音が鳴

つた。

カタンツ

椅子の引かれる音がなり、アルトリアが立ち上がった。

「面白い」

ポツリと言葉をもらじ、生徒Aを石ころでも見るよつて眺めた。

「シユヴルーズとやら、聞くが、この学園はどのよつな教育をしているのだ？」

「つま。いえ、本当に申し訳なく……」

いきなりキレた生徒にシユヴルーズは畠然としていたのか、しどろもどろに返答を返す。

「まあいい、その小物は以降授業に出れなくなるだらつ。手続きを終えておけ」

そう言つた後、アルトリアは教室の扉に向けて歩き出す。  
それに追従するタバサとキュルケ。

扉に手をかけたアルトリアは振り返り。

「一時遊んでやる。表へ出る」

やう告げた。



#### 4話：（後書き）

自分の作品には話の内容が薄いと思いまして。試行錯誤してたのですが、これ以上投稿を延期するのもなんだか悪いので4話投稿いたします。

## 5話・対峙する者達

いつもなら、賑やかな喧騒につつまれているはずの庭園。

しかし、今はそんな穏やかな空気など欠片もなかつた。

朝の授業を受講していない生徒がたむろしていたが、それも庭園へと向かう三組の主従を見て、怪訝な表情を見せながら傍観している。

その主従の背後から聞こえる「お待ちなさい……」との声も、生徒達に不信感を見せる要因になつていていた。

先頭を歩くのは、黒いドレスを着て全くの無表情ながらも寒氣の立つような氣を発したアルトリア。

その隣を歩く、青い髪をした自分の身長よりも高い杖をもつたタバサ。

追従するのは、赤い髪に褐色の肌のキュルケ、その後ろをついてくるサラマンダー。

彼女は忐々しげに、最期の主従を睨みつけていた。

そして、一番目を引かない最期の主従。

説明は端折るが、なんとも普通の生徒だった。

彼に付き従う、蛇の使い魔だけが異様に目を引いていた。

彼女等は庭園の中心まで来たところで止まった。

先頭を歩いていたアルトリアは振り返り、

「うううで良いだろ？」「

機械的に言葉を放つ。

「これより、我が主を侮辱した者の肅清を行つ」

自然体なままに、ただ目だけが冷酷なまでの冷たさを湛えていた。誰も彼もが唖然とした最中、彼等の後ろから追ってきたシユヴルーズが声を張り上げる。

「やめなさい！！ 荒事は校則で禁止されていますーー」

「それが、どうした」

シユヴルーズに目も向けず、敵対するものを冷徹に見つめ続ける。

「つっ！！ 貴女は使い魔でしょうーー 主人の許しも無く……」

「マスター。許可を頂きたい」

タバサはコクツと頷き、教師を見る。

シユヴルーズは一瞬ビクリと震え、それでも気丈に反論を返す。

「そ、そもそもーー 何故このよくなーー」

「己を侮辱され、果てには主すらも侮辱された。ならばその身で購うは当然の事だ」

「しかし……」

「貴様は、自分が侮辱されたなら黙つて耐えるだけなのか」

「いえ……それに、それとこれとは、」

「同じだ。貴様にも誇りがあるように、全ての意思ある者には須らく譲れない物が、存在する。何故、己の事は許せて他人の行為は許せんのだ」

「…ツ」

「下がれ、目障りだ」

「…」「う

アルトリアは霞みから剣を抜き放ち、構えもせずに生徒Aを睨みつける。

突然、アルトリアの手に現れた剣に野次馬は、騒然となつた。ザワザワと囁く声が聞こえる。

「あ、あなたは、あなたは、何故こんな事を…！」

アルトリアでは話にならないと悟つたのか、シュバルーズは生徒を論そぐとする

「いえ、あなたのよほな侮辱を受けて、ただでは済ますことなんてありえないでしょ？」

「何を、言つてているのです？」

「あの見下した目ですよ。あんな目を向ける平民なんて、居なくなつても構わないでしょ。むしろ治安維持です」

「馬鹿な事を…！」

「酷いですね、これでもラインメイジです。平民如きに連れはとりません」

今だに自分の力は絶対だと確信している。

タバサには適わない、だが、その使い魔なら十分相手に出来る。どんなマジックかは解らないが、あの空間から引き抜いたような剣。それを装備した所で所詮平民、メイジには適わない。彼の頭の中には、そんな思考しかなかつた。

「違います！！ 解らないのですか！！」

「先生こそ解らないんですか？」

「何、を」

「平民なんて要らないんですよ。貴族に従う事しか出来ない奴等なんて、何匹死んだ所で変わりません。まあ、安心して見てくださいよ」

そう断言する生徒を、シユヴルーズは畠然と眺めるしかなかつた。  
これが、自分達が導いてきた生徒の言つ事なのか、と。  
これが、貴族たる者の物言いなのかと

「そんな、私は、こんな……」

ワナワナと震える唇に指を這わせ、シユヴルーズは後ずさる。

「目障りだと言わなかつたか」

背後から聞こえる声にシユヴルーズは震える。  
もう、無理だ。  
止められない。

ディテクトマジックを用いざとも解る、アルトリアの身の内に存在する魔力、その剣の内包するナニか、それすらも感じ取れない生徒。

ここで、生徒が怯えでもしてくれたなら、シユヴルーズはそれを理由に貴族としての権力を使ってでも止めるつもりだった。

だが、生徒は何も感じていない、あの恐ろしいまでの力を何も。

「先手はくれてやる。どこからでもかかつてこい」

後ずさり、壁に当つた所で

ガクリと、シュヴルーズの膝が折れ、生徒の詠唱が木靈する。

- タバサ Side -

良い機会。

あの生徒の事は良くしらない、だけど、アルトリアの実力の一目でも知るには良い機会。

そもそも、契約時の一瞬で戦力を把握したつもりは欠片も無かつた。

あれは、言い訳をさせてもらつなら、不意打ちと言つ事もあり一瞬で決着がついてしまつたから。

ただ、圧倒的な強さだとしか解らなかつた。

だから、良い機会。

あの生徒には悪いけど、自分のパートナーを見る良い機会。

「タバサ、許可だしちゃつてもよかつたの？」

それにコクリと頷く事で返す。

目は眼前の、戦闘とも言えないだろう虐殺の場に向かっている。

対峙している生徒は、私からみても未熟。

未だに詠唱の一つも終らないのでは、戦場に立つたその瞬間に矢に貫かれて終る。

彼の見下した、平民の武器で死ぬ。

折角のバジリスクも、ただ傍に控えているだけ、あれでは使い魔が何の為にいるのか解らない。

「貴女がそう言つなら私も構わないけど、あの子死ぬんじやないかしら？」

確かに、最悪死ぬだろう。  
だけど、それが何なのか。

敵対する者の情報の一旦も知る事なく、相手の選んだ場所で戦う。  
それは自殺するのと変わらない。

なら、死んだとしても相手の自業自得なのだ。

「解らない」

「解らないって……まあ、アルトリアも大分頭に来てるみたいだから、どうなるかしら……」

親友の声は少しも生徒を心配しているようには感じない。  
それが少し疑問だつたが、私は眼前の両者から目を逸らさない。

「まあ、私はアルトリアの無敵っぷりはある程度知ってるから、先生の様子でも見てくるわ」

「クツ」と頷く。

その瞬間に生徒の詠唱が完了した。  
……遅すぎる。

- タバサSide end -

「ガゾットー！」

その声と一緒に、バスケットボール大の石の塊が空中に出現し、  
アルトリアに向かつて放たれる。

それに呼応するかのようにバジリスクが地を這い、アルトリアに迫る。  
それを失望したかのよつにアルトリアは眺める。

(これでは、転がっている石を投げた方が実践的だ)

石の塊は無視し、接近してくるバジリスクに注意を払う。  
アルトリアとしては、正直この戦闘を楽しむつもりは無い。  
遊んでやると公言した訳だが、これでは遊ぶ事もできない。  
使い魔は本能で持つて、アルトリアの危険性を感じているのか、  
その巨躯での突撃とも言える速度は中々速い。

怯えながらも主の命に従う使い魔。

このような輩には勿体無い。それがアルトリアの率直な感想だった。

同時着弾を狙っているのは、考えた策なのか。

石の塊とバジリスクは同時にアルトリアを補足した。

石化を司る蛇は顎を開き、胴に噛み付こうと迫る。  
アルトリアは身を逸らす事もせず、舌を左手で掴み取り、振り払  
うように地面に叩きつける。

迫った石塊は、そもそも存在していなかつたかのように消えうせ  
ていた。

ズドオオンッ

バジリスクの叩きつけられる音が響き

「……は？」

ようやく現状を理解した生徒Aの反応した。

半身で杖を突きつけた状態のまま、信じられない物を見たかのように固まっている。

いや、啞然としたのは何も対峙している生徒だけではない。興味本位で見ていた全員が啞然としている。  
魔法のキャンセルとバジリスクに対処したその手段。  
そのいずれもが、思考もしない手段。  
驚いていないのは、タバサとキュルケ、それに召喚の儀を見ていた生徒のみ。

「下らん」

アルトリアは吐き捨てた。

なんだコレは、と。

この程度の輩が主を見下していたのかと。

そう思った瞬間、アルトリアは目の前の生徒から急速に興味が失せた。

戦いにならないのは良い。そもそものスペックが違うのだ、それは構わない。だが、その身の程も知らず、虚勢を張るでも無く、ただ自身の力に酔いしれているだけの下らない輩。

そもそも、その力すらアルトリアから見れば塵芥に等しい物。これ程に、つまらないとは……

もう、こんな事をしていること事態、下らない事のようを感じてきた。  
故に、

「跪け」

「……何、だと？」

「跪き、情けを乞え、ならば見逃してやる」

アルトリアは、路程の石をみるかのように生徒を見下す。

「さ、貴様！！ 僕に膝を折れとー!?」

「そうだ」

生徒Aにして見れば腸が煮え返るような屈辱だった。

この手の言葉は大抵にして、この世界の貴族には禁句だった。  
己の誇りともいえぬ矜持の為だけに生きる貴族。それが誰かに膝を折るなど、王族くらいにしかありえないのだ。

「ふざけるなー！ 僕が誰か解ってるのか！？」

「下りん、貴様等にはソレしかないのか。己の体で示す誇りが無く。言葉すらその矮小さを引き立てる物でしかない

「ツツ！ーーー！」

生徒Aの顔はいつも滑稽なくらいに赤面していた。

それが怒りか、それとも羞恥か。それはアルトリアには解らない。むしろアルトリアにはどうでもよかつた。

いや、アルトリアの中にも少しの感情の波が立った。

ああ、こいつは本当に……

心底、下らない者を見る瞳で見つめ一言。

「哀れだな」

それで限界だった。

「！」の平民がつ！――！」

叫びと同時に、杖を突きつけ。先ほどとは比べ物にならない程小さな石礫を放つ。

「ああああああああつ！――！」

石の弾幕は目を覆う程に多かつた。  
声にもならない叫びを上げながら、全魔力でもって生徒Aは石を放つ。

拳大の大きさの石が隙間無く放たれ、その威容は人ならば避ける事など出来ないほどの密度。  
しかし、それでも、

「本当に、下らん」

アルトリアの目の前で忽然と姿を消す。

一粒すらも届く事は無く。何も無かつたかのように悠然とアルトリアは眺め続ける。

「なん、なんだ　何なんだ、お前は！――！」

激昂しながらも、体は恐怖しているのか、生徒Aの体は小刻みに震えていた。

誰もが、沈黙し、アルトリアの次の行動を恐々としながらも眺める中。

動くものがあつた。

ジヤアアアアアアアツアアアア！

そんな、雄叫びが上がり、アルトリアの背後でその顎を開く。  
それはアルトリアを丸呑みせんとしたのか、最初のそれを上回る  
アギト  
強大な顎だった。

生徒Aの顔に一瞬、笑みが登り、そして

サンツ

何かを転ぶ音が庭園に響き

ノウツアーデ

一泊の間を空けて、何かが落ちる音が響く。

それを見たのは、この庭園にいる全ての者だった。

タルトリニア

剣の速度は目に映る事も無く、見た物には戻ら先が消失したよう見えていた。しかし、アルトリアがバジリスクに向き合う形となつた時には、剣は血に濡れ、地面に点々と赤い模様を描くのみ。そして、睨みつけるアルトリアの目の前で、ユックリとバジリスクの首と胴はズレ初め、地響きを立てながら、地に落ちたのだった。

そして、思ひ出したかのよつて、首のなに巨脛から血が进る。

二十一  
卷之二

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ

あああああああつああああつあああああつああああつあああつ……！」

生徒の絶叫が木靈した。

### -キュルケSide-

目の前で行われているモノは、人の目にはどんな風に映るのかしら。

ドレス姿の少女が、身の丈の3分の2ほどの剣を操り、瞬く間に【地の象徴】とも言えるバジリスクを下した。

魔法は元から効かず、物理的な攻撃も、並の人では対処出来ない【蛇】に相対して尚アルトリアの方が早い。解つてはいたけれど。

アレはただただ、強い。

武の頂点に立っているかのよつた、そんな強さ。人では届く事の無い幻想。

ああなりたいと誰もが望み、だけど不可能だと誰もが諦めるその称号。

始祖ブリミル以後、現れる事の無かった、他を寄せ付けない強さと心を持つ者。

そう、あれこそが、天上天下に唯一人行く者。陳腐な言葉だけれど【最強】とそう呼ばれる存在の一人なのでしょ

「そん、な……これほど、なんて……」

先生が取り乱すのもおかしくは無いわね。

「ミズ・ショブルーズ、落ち着いてくださいな。彼女は敵対しなければ殺しませんわ」

「ミス・シルプストーーー！ アレを止めてくださいーーー！ あの子が殺されてしまつーーー！」

震える指でアルトリアを指差しながら、懇願するよつに私にすがり付いてくる。

とりあえず抱きとめるけど、私には止める事は出来ない。唯一それが出来る子は、殺す事すら許容してゐるんですから。タバサに目を向けるも、なんら変化はない。いや、少しだけ、頬が赤くなっている。

まあ、気持ちはわからなくも無いわ。

そう思い、アルトリアに目を移す。

血を浴びた姿のまま、バジリスクの首があつた場所に顔を向けながら目を瞑つている。

その姿は、凄惨な場所だと言つのに、その容姿もあつて直能的な美しさを持つている。

僅かに弧を描く口元も、邪悪さを感じさせる事などなく、むしろ慈愛の発露にも見える。

ああ、危険だわ。

そう思つても、心に枷を嵌める事なんて出来ないので。

捉えて放さない、妖艶な姿。

「見事」

ポツリ、と。

アルトリアが呟く。

賞賛の声のように聞こえたが、聞き間違いだつたかしら？

「寄り添う主を間違わなければ、貴公とは良き関係を築けたかもしれん」

ああ、本当に賞賛してたのね。  
しかも、使い魔を。

「だが、安心するがいい。すぐて、貴公の主もソコへ逝く

まるで、聖句のよくな。

そんな神聖をさえ感じる言葉だつた。

内容は残酷無比なはずなのに、綺麗な言葉に聞こえる。

「ツヘルプスター…… お願いします…… 止めて…… 止めてく  
ださい……」

言葉の余韻に浸っているのに……

しかし、この人はその意味を理解しているのかしら？  
私がアルトリアを止めに入つて止まるとしても？  
それは冗談にもならないわ。

「邪魔するな」って一刀両断にされるのが目に浮かぶ。

そもそも何故、自分で止めると言つ思考がないのかしづら。何度も挑戦すればいいのに。

「これほど容易に他人に頼る姿は、どうしても好きになれない。何

故、あの子のように一人立ち向かう事が出来ないのかしら？」

「無理ですね。ミス・シューヴルーズ。私では殺されるだけです」  
「では、ミス・タバサに助力を！－！ ミス・タバサ！－！」

やはり自分では動かない。

頑張っているのは解るけど、根底にあるのは自分以外の力。

「何？」

呼ばれて不機嫌なのか、親友の目は氷のよう冷たい。

「ミス・タバサ、使い魔を下げてください！－！」

「何故」

「なつ！－！」

やつぱり無理よね。

タバサは許容してゐるのね。

「お友達が死んでしまうのですよ！－？」

「友達じゃない」

「つ！－！ ならば同級生です！－！ 同じ部屋で学んだ生徒が死んでしまうのです！－！」

なんて、おめでたい頭なんかしづら。  
あの言葉を聞いて、それでも友達として居る子がいるなら見てみたいわ。

「だから、使い魔を…」

「あれは自業自得」

「何を！…」

「静かにして、最後まで見たいから」

「そんな事を言つている場合で…「シン…///ス・タバ…ゴインッ…ザブツ…！」

呪文を唱えるのも面倒なのかしら？

タバサつたら血漫の杖で、先生の頭をぶん殴つて氣絶させてるわ。後で問題になるでしきつけど、まあ、構わないわ。

一仕事終えたように額を拭うタバサを横目に、アルトリアに視線を戻す。

周りでは、教師を呼んで来いと叫ぶ声が聞こえるけど、もう無理ね。

間に合わないわ。

先生とやり取りをしている内にアルトリアは、あの名前もしらな生徒に向かつて歩き出している。

叫び終えて放心しているのか、生徒に動きは全くない。

もつとも、使い魔を無くしてつてのが正しいのでしょうか。もう終つたわね。

アルトリアの目の前には、使い魔を無くしたメイジがいる。

使い魔とメイジは一心同体。

アルトリアはキュルケにそう教えられた。

ならば、使い魔の後を追わせるのは自明の事。

年端も逝かぬ小僧だとて、アルトリアには関係の無い事だった。もつとも、元より跪かなかつたのだから、殺す事は決定していた。

なにより力を使うのだから、敗れた時の覚悟があつて当然。

これまでのやり取りから、この生徒にそんな覚悟は無いと推測していたが、それもまたアルトリアには関係の無い事だった。  
戦場にルールも知らずに上がり込むなど、あつてはならない事だ。

「これから死ぬ訳だが、言い残す事はあるか？」

目に光の無いメイジを眺める。

しかし、やはりと言つべきか、こちうに反応する気力は無いようだ。

使い魔の首から一時も目が離れない。

「どうか、ならばあの使い魔に感謝しろ。痛みも無く逝かせてやる」

ヒュン

剣の振られる音がなり、

ガキンッ！！

次いで、剣の噛み合づ音が鳴った。

「ぬ」

アルトリアは眉を歪め、剣の所持者を見る。

「テメエ！！ 何やつてんだ！！ 死んじまうだろう！！！」

そこには一人の少年。  
今朝に見た同郷の者がいた。

### アルトリア能力表

・アルトリア＝ペンドラゴン  
・女性 153cm 42kg

・秩序・混沌

・筋力：A (A+) \* 1

耐久：A

俊敏：C

(B) \* 1

魔力：EX

幸運：D

宝具：A++ (A++) \* 1

対魔力：B (A) \* 1

騎乗：本人の努力

・直感：B

・魔力放出：EX

・カリスマ：D (A) \* 2

・風の加護：C (A) \* 3

タバサとの契約により行使可能となつた【風の加護】自動での発動は不可能。インビジブル・工アも自分で操つての展開は可能だが、面倒な事もあり使用していない。

現在はルーンの力を別の場所に次ぎ込んでいる為、【風

の加護】を自在に操る事は不可能となつてゐる(\* 3の理由)。

- ・宝具・約束された勝利の剣エクスカリバー
- ・この世全ての悪(劣化版)

- \* 1=【風の加護】を100%使いこなせる事が可能となつた  
時にその補正を受けれる
- \* 2=とある地域では彼女の力は増大する。土地に由来した補正

## 5話・対峙する者達（後書き）

不況の波が我が社を襲つた――――――！  
とりあえず再就職はしたけど、マジで凹んだ……。  
感想の所に2・3日で投稿したいとか吹いて「ゴメンナサイ」。  
首なつた瞬間から小説の事がぶつ飛んでもました……。  
あと、なにやら「テスノート」の方ですがめちゃ続き期待されてるみたい  
いなので、次はそっちの投稿します。

## 6話・フルボッコ

「まつ」

少し感心したかのよう声が漏れた。

放心し、膝を付いている輩はどうでもいい。

しかし、アルトリアは自分の剣を受け止めた小僧に興味が出た。いくら墮ちたとは言え【約束された勝利の剣】は聖剣。その斬れ味は神秘籠つた日本刀よりも凄まじい。

しかも今回使っているのは抜き身の刃、風の鞘を無くした凶刃なのだ。

それを担い手であるアルトリアが振るい、それを正面から受け止めた。その異常性。

それに興味が出た。

面白いかもしれん。

「ツヅア!!!」

とりあえず眼前にあるサイトの腹を蹴り飛ばし、自身の愛剣を見つめる。

愛剣に変わりは一つもない。

黒々とした聖剣からは掛け離れた存在となつたが、その剣の持つ美しさも、内に秘めた星々の燐光の恐ろしさも、凶悪になる事こそあれど、弱体化している部分は見えない。あえて言つならば神聖さだが、それは今のアルトリアにとって害にしかならない。

ヒュンヒュンと2、3度素振りをしサイトに目を向ける。

「貴様、何をした」

2mほど吹き飛んだのか、腹を押されて咳き込んでいる様は、アルトリアの剣を受け止めた者とは思えないほどに無様。

少し思案し、剣に目を移す。

それは凡庸そのものな剣だった、宝具のように対峙するだけで感じる何かなど欠片も無い。僅かに魔法の痕跡が見られるが、大した物ではないように感じる。

おそらく観賞用の騎士甲冑に付いていたロングソードだろう。だが、そんな物で一太刀と言えどアルトリアの剣を受け止めた。

「何をした」

「ドンッ！！」

と、そんな音がするほどの衝撃が庭園を襲い。

次いで地を揺るがす程の魔力がアルトリアから放出された。

「……うあ

「相変わらず」と言つたかなんと言つたか、なんて馬鹿魔力、……」

前者はシュバルーズで、後者はキュルケ。

経験のあるキュルケにしてみれば、これでもまだ手加減している段階だらうと思っている。

凄まじい事は凄まじいが、魔力が物理に干渉するほどでも無い段階なのだ、あの医務室前の廊下の惨状と照らし合わせれば、まだまだ底がしれない。

次いでキュルケはシュバルーズに眼を向ける。

タバサに殴られ気絶したにも関わらず反応するとは、魔力感知には優秀なかもしない、もっともそういう人は容易く魔力に酔

うので、十分に修練を積まなければ戦線には出れない。

「ゲホッゲホッ…クソッ」

腹を抱えて「ロロ」と転がっていたサイトは、ようやく収まつたのか、悪態をつきながら立ち上がる。

しかし、それを待つほどアルトリアも優しくは無い。つかつかと歩みより【ゴンシ】と次は頬を殴りつける。アルトリアとて加減をしているが、魔力放出も加わった拳は、それだけでも大岩を碎く威力だ。

「ツー！」

無様に吹き飛び、壁にぶち当たった時には剣すらも手放している。地面に倒れ込み、頬を押さえ「痛つて……つ」と叫ぶ姿は本当に情けない。

「何をしたと、聞いている」

三度目の問いかけ、それに対するサイトの答えは、

「ツペ」

地面に唾を吐き捨てる事だった。

もちろんそれは誤解だ。

サイトとしては、碎けた歯を吐き捨てただけなのだが、アルトリアと周囲にとつては違う。

それは答える気が無い、もしくはアルトリアを挑発していると捉えた。

「そつか、ならばしばし待て、次はお前だ。」

絶対零度の視線でサイトを一瞥し、そして今一度剣を振りかぶる。次は誰が止めようが、それすらも断ち切る力を両手に込めて。

「やめろって言つてんだろ！… イテ————ツ！… ああ、ちくし  
ょう！… アンタ俺の同郷だらうが！… なんでそんな簡単に人を  
殺すなんて言えるんだ！…」

サイトは自分の体が先ほどまでは違ひ、妙に重いと感じながらもアルトリアに向かつて走り寄る。

だがしかし、アルトリアは一警もせずに剣を振り下ろす。アルトリアとサイトの距離はゆうに10mほどあり、ガンダールグの刀のせいな、一瞬の間に高校三の身体を切り落す。

無情にも剣は振り下ろされ。

「あ」

パタタタタタタタタツ

血が地面に落ちる音が連續し、

卷之三

地面に連續して何かがバウンドし、サイトが吹き飛ばされ激突した壁に何かが当る。

その球体を目で追つていたサイトは、停止したソレを目にした瞬間、これまで経験した事のない吐き気を覚えた。

目を逸らし、背を丸め、口に手を当てる。

そして、もう一度ソレに目を移す。

眼球が片方あるべき場所になかった、垂れ下がつたソレは砂利で汚れ、歪な橢円になつてゐる。

まともは着いている眼も半開きはないでいて、徐々に光が失れていくのが解る。

舌はだらしなく、出され、それも砂利によつて汚れていて、嫌悪感が募る。

る。

全てを認識したサイトは、

「おえ、えつ」

胃にある物全てを吐き下した。

サイトSide

んだコレ。

なんでこんな事が、

ああ、確かに、ネットで公開される死体とか、処刑の瞬間とか、面白半分に友達と見た事あった。そん時は気持ち悪いーとか、良くこんな事出来るなーとか、笑って話せてた。

だけど、こんな、こんな簡単に入つて死んでいいのかよ？

なんでだよ。

なんでこんな事出来るんだよ

۱۷

キュルケさんと一緒に居るのも、身分とか訳の解らない物に囚われない人だからって、尊敬もしてたのに。

次に会つたら、地球に帰る方法を探そうつて、仲良くやろうつて  
言いたかつたのに。

なんでこんな……

ドンッ

不意に、背後で音がして俺は振り返る。

そこでは、アルトリアと呼ばれた少女が、血が噴出する死体を蹴り飛ばしていた。

あの蛇の血は自分から浴びてたように思つたけど、あの人の血は嫌らしい。

自分の方に飛んでくる血は、彼女から噴出する何かが押し留め、黒い風がどこか別の場所へと流していくのがみえる。

全く現実感が無い。

これは夢か何かなんじやないか？

あの変な鏡も、そうだ、現実感なんて初めてからなかつた。夢だ。

フラフラと眼を彷徨わせる。

ピンク色の髪が眼に止まつた。

多分ルイズだろう、顔は蒼白なのに、眼だけは確りとアルトリアさんを睨みつけてる。

ああ、なんで俺はルイズの言つ事聞かなかつたんだろう。あいつは止めてくれたのに、尋常じやないつて、もしかしたらエルフかもしれないつて、死んじやうかもしれないから行くなつて言つてくれたのに。

いや、何言つてんだ。あれは夢だルイズも夢。

そうだ、全てが夢

「剣を取り、同郷の者」

のはず、なのに。

清んだ声はいつそ聖女のようなのに、血で全身を濡らした姿と、

右手に持つ剣がそれを否定する。

綺麗な、それこそ、ルイズよりも綺麗な人なのに。

同郷だと知った時、馬鹿馬鹿しくもチャンスだと思った。仲良くすればいはず……そんな事を思つてた、上手く一緒に帰る方法が見つかれば、地球に戻つた時に自慢できる、そんな事を……

「……よもや、臆したか」

体が震えるのが解る。

解つてる。これは現実だ。解つてるつて、ただ認めたくないだけ。

眼が細くなつて俺を見据える、あの眼が怖い。

躊躇無く人の命を奪える、その精神が怖い。

だけど多分、もう逃げられない。

ちくしょう。

死にたくない。

ガクガクと震える体を引きずつて、剣の落ちてる場所まで歩く。チラリと首が見えるけど、それは認識しないようにする。

剣を握ると不思議と痛みが和らぐ。

折れた歯は、もうどうにもならいけど、あの激痛が治まるのはありがたい。

見よう見まねで剣道の構えをとる。

アルトリアさんは、なんの感慨も無く俺を見て、口を開く

「初手はくれてやる」

初手も後手も無い、立ち向かえば死ぬ。

それが漠然と解る。

だけど、さ。

引けないだろ、男の子なんだから、

「俺にも意地があるつ！――！」

勝手に動く体が気持ち悪いけど、多分これが最適な型なんだろ。死ぬ場面しか見えないけど、それに向かって走るしかない。引いても死ぬんだ。前倒れに死んでやる――！

サイトSide end

「俺にも意地があるつ！――！」

そう叫んで走り寄つてくる少年を見据え、アルトリアは少しだけ奇妙に思った。

剣を持っている状態と、無手の状態との乖離が見えたのだ。武器を持ったから強気になる。

その手の精神状態の変化ではないように思えた。

ともあれ、上段からの撃ち降ろしをバックステップで避ける。そこから更に脇構えに剣を携えたサイトはダッシュし、アルトリアに肉薄する。

勢いをそのままに、サイトはロングソードを振り上げる。ブオーンと風きり音が鳴り、土煙が上がる。

しかし、それもアルトリアは僅かに身を捩るだけで回避する。

「うおおおおおおおおおお――！――！」

打ち下ろし

横薙ぎ

## 袈裟懸け

逆袈裟

そして、再び斬り上げ

猛攻と呼べるほどの速度での打ち込みは、しかし、アルトリアは、剣を持つ手を左肩にのせ、振り落とす。

キン

甲高い音を立てて転られた日シグソーブの音と

「下りん」

絶対無比な騎士の言葉で止まる。

に突き刺さり、

「飛べ」

蹴り飛ばされる。

「ツ！…！ツガフ、おえー」ほつぐうう」

鈍い音を立てて吹き飛び、壁に激突したサイトは咽込み、けれど限ごけはアレトリアを睨みつかる。

「私の剣を受ける程の技量を見せたかと思えば、よもや使われているだけとはな。」

サイトは何を言われているのか解らぬ、眉を寄せる。

「なに、を、ゴホッ、いつてやがる」

「自覚が無いとは、それではこの先、生き残る事など……」

そこまで言つてアルトリアは止まつた。

信じられない。と言つようとも眼を見開き、己の手を見る。

「私は、何故……」

先ほど確かに生徒を殺した。

しかし、アルトリアは自分を見返してみる。

あの時、私はアレを殺す瞬間に殺氣を滲ませていなかつた。

以前なら、どんな矮小な者と対峙しても噎せ返るような殺氣を撒き散らしてはいなかつたか？

そうだ、召喚された当初など、僅かに漏れる殺氣の渦で失神した者もいたはず。

「妨害されている？」

いや、私が気付かない防衛術式など皆無に等しい。

ならば、これは自分が押さえ込んでいるのだ、無自覚に。

湧き出る殺意に封をしているのは自分自身。しかし、そんな配慮をするなど、自分で言うのはなんだが、ありえない。

シャルロットに対してならば解るが、有象無象に対して気をくば

るなど論外だ。

「……何故」

周りを見回し、そして思った。

やはり、殺意に対する恐怖が無い。あの眼は殺人に対する嫌悪感と、自分の解らない者が居る事への困惑だ。

倒れている者もいるが、死に対する免疫がなかつたからだろう。そして今一度、同郷の者へと視線を移し、理解した。

「そりが、そりが事か……」

刻まれた主従の印をワシ掴む。

右肩に彫られたそれを、剥ぎ取りたくてしょうがない。

勝手に心を弄られる嫌悪感。

己の与り知らぬ所で弄ばれる不快感。

令呪が子供だましのような呪の形、あれはまだ主従としての型を前面に出していたように思える。

しかし、このルーンは違う。

力を与えてくれるのだろうが、その実これは奴隸の刻印に等しい。

しかも永続性のそれ。

忌々しい。

ジヤリ

そこまで考え、眼の前の少年が立ち上がった事で思考を打ち切る。

「抗うか」

「あたり、まあ だ」

この少年もまた、あずかり知らぬ所でルーンの恩恵を受け。  
そして精神を侵食されているのだろう。

手に持つロングソードは鐔の少し上から斬り落とされすでに武器としての用途を得ない。

しかし、素人故かそれを手放す事など出来はしない。

サイトは未だ折れた剣を武器として認識しているのだ。

それは幸か不幸か、ルーンはサイトの意思に従いソレを武器として認識した。

その加護によりサイトは肋骨を折られつつもまだ行動が可能だった。

「何も 出来ないまま 死に たくねー」

ズリズリと足を引きずりながら前進する。

対するアルトリアは、冷えた視線を投げかけるだけ。

亀のような遅さで進み、アルトリアの眼前まで来た所で腕を振り上げる。

それは剣として使う型ではなく、拳をメインにした振り上げ。

およそ速度の乗らない拳は、容易くアルトリアに止められる。

すでに興が削がれたのか、右手に剣は見えない。

パシリと拳を受け止め、アルトリアは即座にサイトの顎をかち上げた。

骨の碎ける音が庭園に響く。

浮いた体に更に招掌を当て、

「ツハ」

双掌打を放つ。

感触からかなりの数の骨が折れているだろ？と、そう思いつつもアルトリアに躊躇は無かつた。

声もなく吹き飛ばされるサイト、それでも剣を手放さない事にはアルトリアも感心を通り越してあきれ果てた。  
あれは全くの無駄な行為なのだ。  
武器持つ者がサイトでなければ。

「ゲホッ、エホッ」

「ロロ」「ロロ」と回転しながら吹き飛び、静止したと同時に咳き込む。ビシヤリと血が零れてい、内臓にかなりの損傷があるだろ？

ジャ、リ

サイトはまた立ち上がる。

顎の骨が折れている所為か、口は開かれた状態で、延々と血を吐き出している。

ザリツザリツと地面を踏む音が連續し、アルトリアを田指して進む。

「もう、眠れ」

アルトリアは自分を田指して歩み寄るサイトに語りかけ、次いで腰ダメに拳を構える。  
それで誰もが解つた。  
これで終るのだと。

徐々に近づくサイドは、他の者には血の断頭台に登る死刑囚にしてか見えなかつた。

そして、サイドがあとへと並んで近づいた所で、

「 もう、やめて…！」

ピンク色の髪がそれを遮つた。

サイドを背後に庇つように立ち、涙を流しながらアルトリアを睨みつけてくる。

「 サイドも、もうこいでしょう…… 寝てなさいよ…… どうして起き上がるのよ…… 殺されるって解るでしょう……」

「 やつこお、なまく、（やつと、名前）」

「 これからこいつでも呼んでも呼んでもげるから…… もう寝てなさいよ……」

「…」

自分が碌に発音できないと気付いたサイドは、首を振り否定する。

「 なんだよー！ 馬鹿！」

「 意地が、あるんじら（あるんだ）」

ルイズは馬鹿すぎる、と思考の隅で考え。

アルトリアを更に睨む。

「 あなたももうここでしょー…… そんなに人が殺したいなら戦争に行きなさこよー……」

「 違うな

「 何がよー…！」

「先の輩は私の主と私を愚弄したが故に殺めた」

尤も、途中で譲歩はしたのだが。

と眩き、それもまた異常だったなと考え、内心顔を歪めた。

「ならサイトにはもう暴力を振るわないで！… これ以上したら死んじやうわ！…」

「そうだな、次の一撃はその身を貫くだらう」

比喩では無く貫通する。

その一言でルイズの顔に朱がさした。髪を振り乱し、涙をポロポロといぼしながら叫ぶ。

「つな…！… つば、いおの…！… 私のサイトに手だすんじゃないわよ…！」

震えながら杖を突きつけ、それでも手でサイトを下がらせようとしている。

どんな大告白なのよ、とキュルケは胸中で思つが、それとは別にルイズの姿に感銘を受けっていた。

何にも屈しない心、己悪に立ち向かう勇氣、己を貫く信念。

アルトリアがタバサに求めた誇りが形を成したような、そんな存在がルイズなのではないか？

思えば、ルイズとは家の関係が悪く、合つ度に罵り合い、魔法を通してしか彼女を見た事がなかつた。

だが、魔法と言つフィルターを取り除いて見たルイズと言つ少女は、これほどに気高いのか。

キュルケにとつて革命とも言えるほど、ルイズに対しての認識改善が行われていた。

そして、その姿に何かを感じたのは何もキュルケだけでは無い。タバサはキュルケ以上に認識を変えていた。

ゼロと銘を打たれた魔法使い。

それなのに、強大な敵に対峙し続ける事の出来る勇気。

力がない癖に、それでも挑み続ける事の出来る信念。

使い魔を守り、己の身すらも危険に晒すその尊いまでの慈愛の心。

それに類似する人を、もう一人知っている。

王となり、己の親族をゴミのように捨て去った愚かな男の事だ。あの男もまた、あの少女のように輝いていた時期があつたのだ。

ならば、何があの男をあれほどに歪めたのか……

ギュウと杖を握り締め、思う。

あの男を変えた何かが、もし、無かつたのなら、私達は今でも、あの人を姉と……

そこまで考え、頭を振る。

それはもう、過ぎ去った昔日なのだと。

もちろん、二人の考え方の中に勘違いもある。

だが、それでもルイズは気高いのだと、二人はそう思つ。

「貴公は今朝のメイガスだな」

構えを解き、感情の籠らない瞳はそのままにルイズに対する。

「そうよ。貴女は今朝の無礼者よね」

ビクビクとしながらも、ルイズは虚勢だけは負けない。

「ふむ。私はこの世界の仕組みに疎かつたのでな、礼を失したのな

「は？」

「は？」

「え？」

その言葉はルイズだけならず、タバサとキュルケも驚いた。あのアルトリアが謝罪だ。驚かない方がおかしい。

「え？ は？！ な、なんで！？」

「私なりのケジメだ」

「い、いいいいらぬわよ！－ そ、そその代わり！－ サイトは助けて…」

「ふむ」

アルトリアは、思考するかのように眼を瞑る。その瞬間。

シュンッ！

風きり音が鳴り、アルトリアの頬を掠める物があった。

「ほつ」

「「「なつ！－！」」

ルイズの髪を左手で搔き揚げ、右手に握った折れた剣を突きつける、サイトの姿。

背後に居る為の死角を利用した不意打ちだった。

ルイズの右肩から覗く瞳はギラギラと輝き、口は悪さが成功した悪ガキのような笑みを作っている。

「いつひ むくひて やつは そ（一矢報いてやつたぞ）」

アルトリアの頬から乾きかけた血とは違つ、真つ赤な血が流れ落ちる。

それを見届け、力尽きたのか、ルイズにもたれ掛かるようにしてサイトは氣を失つた。

ガララアン

剣が落ちる音が響き。

「見事な意地だ」

自分の頬を触りながら、ポツリとアルトリアが呟く。

「うひの馬鹿！！ 駄犬！！ 雑草！！ ミジンコーーー！」

胸元にある手に力アツと顔を真っ赤にしながら、とりあえず罵詈雑言を並び立てる。

不自然な体勢のまま、サイトがずり落ちないように支える。背に当る胸板には堅さがなく、フニャリとしたなんとも気持ちの悪い感触。

折角、助けようとしたのに、この仕打ちはなんだーーー！ ルイズは身も心も涙で濡らしながらアルトリアをチラ見する。

「はえ？」

そこには憤怒で染まつた顔は無かつた。  
不機嫌そうな顔でも無い。

アルトリアは微笑んでいた。

「あ、あの…怒つてないの？」

おずおずと聞くルイズ。

それにアルトリアは無表情の中に、僅かに笑みを浮かべ、

「ああ、見事と聞ひ他ない」

そう言つた。

しかし、それで困惑するのはルイズだ。

これは騙まし討ちのような物で、しかも顔に傷が出来たのだ、ルイズなら絶対にキレていふと言つ自覚がある。

「なんですよ？」

ボソッと呟くルイズだが、アルトリアがキレて無いなら、まー良いかと思い直す。

余計な事を言つてキレられてはたまらない。

「なら、サイトの事は……」

助けてくれるんだしょ？

そう聞こいとした言葉はアルトリアによつて遮られる。

「貴公の名を聞きたい。」

「え？」

「名を教えてはもらえないだろつか？」

「あ、え。えつと、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ」

「私の名はアルトリア・ペンドラゴン。雪風のタバサの使い魔」

「あ、うん」

なんだろ、これ。

ルイズの思考はそれに尽きた、人を殺すような人なのに、やつさまでサイトの事を殺そうとしてた人なのに。

なんだか、ホンワカ？

空気が温くなつたようなそんな感じ。

尤も死体が一つ転がつてるので、微笑ましい光景には到底見えないのだが。

「ルイズと呼んでも？」

「あ、うん。いいわよ」

「ではルイズ。貴公の一いつ名はなにか？」

何か期待するような瞳の輝きに、ルイズは後ずさりたい気分になつたが、背にはサイトがいるため、そんな事は出来ない。

「……ゼロよ」

小さく呟く。

この一いつ名は尊称ではなく、むしろ逆。ルイズを貶めるだけの二つ名だった。

だけど、二つで答えないのは正直、怖い。

嘲笑が返つてくるんでしょ。

そんな風に思つていたルイズだが、アルトリアの言葉は

「ふむ。ならばそなたは無限と言つ事か」

そんな言葉だった。

「はあ？！ 何言つてゐのよ…… ゼロよゼロ…… 魔法成功確立  
0のゼロなの……」

羞恥で真っ赤になりながらも叫ぶ。

「ルイズ、貴女は何を見ているのか」

「は？」

「その少年は使い魔としては最上の者でしょう。心が強く、ローン  
の加護に置いて、ある程度剣も扱う事ができる。それこそ腐れたメ  
イジなど一刀の元に下す事が出来るほどだ」

「え？」

そんな事は寝耳に水だった。

平民はメイジに適わない。それはこの世界の不文律だと思つてい  
る。

そんなルイズにとって、その言葉は衝撃だった。

「そして、こちらの世界ではメイジの強さは使い魔に現れるという。  
ならば貴女は一体どれほどの実力者となるのか」

「で、でも、ゼロよ？ 今まで成功した魔法なんて一つもない……！  
全部爆発して終るわ……！」

「どこが失敗しているのか私には解りませんが。…………なるほど、  
0とは1がなければ流転しない、ならば貴女はまず「0」の1となる物  
を探せ」

そこままで言い終えるとアルトリアは踵を返し、タバサの元へと向  
かう。  
と、思われたが振り返り。

「早く治療しなければ、その少年は死ぬ事になるが」

タバサに向き直り歩き始める。

訳の解らない事を言われたルイズは、しばし放心していたが、その言葉で再起動し、ワタワタと医務室に向けて駆けていく。

「ただいま戻りましたマスター」

僅かに下にある目を覗き込む。  
そこには、何故か不貞腐れたように眼を合わせてくれないタバサ  
がいた。

「どうしたのです？」

ルーンに対する嫌悪感を表にも出さず、アルトリアは問いかける。

「なんでもない」

そんな事ないだろう。

そう思いつつも、アルトリアは主がこのような状態になる心当たりは無い。

「ふむ、血を浴びた身は嫌いでしたか」

アルトリアは、それしか思いつかない。

しかし、タバサはその言葉を聞いて不満だったのか、アルトリアの手を握る。

つまり嫌いではないといふ意思表示だ。

「ぬ

ビーハしたものか。

困惑するアルトリアだが、キュルケの笑い声がそれを遮った。

「何がおかしいのか」

「フフ、別におかしい事なんて無いわよ?」

口元に手を当てながらの言葉では全く説得力がない。

アルトリアは【話せ】と言つ意思を込めてキュルケを凝視する。

「わ、解ったわよ。……………ルイズには優しくしてたのに、なんで私にはそんな態度なのよ」

ボソボソと愚痴り

「それで?」

アルトリアの催促がきた

「はあ。ルイズに優しくしたから、嫉妬してるんでしょ?~。 そうよね?」

溜息を一つついて自分の予測を話す。

「ちがハ」

しかし手はよつと一層強く握り締められる。

「私は優しくしたつもりは無かったのですが、そうですか」

「……ちがう」

なるほど、此度の主はかわいい。

そんな事を思い、頭を撫でようと腕を動かし、そして止めた。血に濡れた手で、この髪を汚すのはまだ早い。と。

「ふふ。ではマスター、身を清めたいのですが、水浴びの出来る場所などないでしょうか?」

ツーと視線がアルトリアに向けられ。

「クンと頷き。

「うう」

タバサはアルトリアの手を引き歩いていく。

「私はルイズの方を見てくるわ。そつちはよろしくね、タバサ。」

それに「クンと頷きを返す。

残ったのは二つの死体と、氣絶したシユヴルーズ他多数の生徒達。この事はすぐに学園長に報告され、炎蛇のコルベールが呼び出される事となつた。



## 6話・フルボッコ（後書き）

なんか予告してたのにごめんよー。  
しかし、多分6話と4話は後ほど書き直すと思います。

とある一室、老人が頭を抱え、机に突つ伏している姿があった。彼の名前は【オールド・オスマン】トリスティン魔法学院の学院長を勤める老人である。

何故、彼が頭を抱えているのかと言つと、それは彼の目の前に鎮座する大きな鏡にある。その鏡に映る景色は普通の庭園を映し出した物だった。しかし、そこに異物が映し出され“普通”とは掛け離れた光景となっていた。

その異物とは、庭園の中央に鎮座する首の無い死体が二つと、ソレに付いていたであろう頭が二つ、庭園の壁際に転がっている。それだけで、いつもなら生徒が賑わう庭園は、墓地のような静けさがあり、また戦場のように荒廃してみえる。

オスマンの頭を悩ませている事は正しく、その死体とその下手人である。

自分の監督不行き届きがどうのと言つ話ではない、もちろん理由としてそれもあるのだが、話の要はそれでは無い。

死んだ生徒の親への報告の面倒さ、この事態を未然に防ぐ事のできなかつた教師への罰則など、考え出したらキリがないほどに事後処理が面倒な状況なのである。

なにより、この事態を引き起こした人物の事で頭を悩ませていた。

「ぬう。あれは人では無いよつと思えるのう」

魔法の完全なキャンセル能力。

ただそれだけ。だが、そのなんと異常な事が。

オスマンとて音に聞こえたメイジである。対処の方法はおぼろげながら思い浮かぶが、それでも勝負をして勝てるか？ と聞かれれば首を捻らざるを得ない。

しかも、剣を持たせれば傭兵など足元にも及ばない武を持つている。

唯一の救いはアレが使い魔として在り、そしてマスターであるタバサに一応従つてゐる事である。

本来なら排斥しなければいけない対象なのだが、それは不可能だつた。タバサの背後に控える者の関係もあり、彼女は学院の一存であつかえる立場には無いのだ。

どう言つた扱いにするのか、これから考えなければならない

「ン、ン」

「ん？ なんじゃね？」

ウンウンと唸つてゐるオスマンだったが、唐突に扉がノックされた  
「ミスター・コルベールをお連れしました」

声の主の名前は、ミス・ロングビル。

本来なら机の隅に座つて秘書のように事務的な仕事をしてゐる彼女だが、今回は違つ。

彼女は学院長の言いつけにより出でていたのだ。

「うむ。入りなさい」

だらしなく頭を抱えていた体を起こし。

顔の前で手を組み合わせ、出来るだけ威厳ができるような姿勢にな

る。

「「失礼します」」

扉が開き、長い縁の髪をながしたロングビルとコルベールが入室していく。

「オーラド・オスマン。今回の呼び出しが一体どうやう事ですか？  
なにやら学院の随所で慌しく走り回っている生徒を見かけました  
が」

学院長の前で立ち止まつたコルベールは早々に用件を聞きだす。

「つむ。恐いりへはこれの関係じゃねつな

眼で鏡を促すオスマン。  
それに従いコルベールは鏡を覗き込む。

「庭園ですか…………これは…………っ！」

最初は訝しげに鏡を見ていたコルベールだったが、一つの死体を  
眼にし驚愕した。

およそ学院とは無縁とおもっていた光景だったからだ。

「……間に合いませんでしたか」

「ルベールと同じように鏡を覗いていたロングビルもまた落胆した  
ように言葉をこぼす。

「つむ。見てもらつて解ると思つたじやが、生徒一人名とその使い魔

が死亡した

「な、なぜ……」

「その生徒がの、とある生徒を侮辱したそうじや。その汚名を雪そよがんと決闘をした。その結果じやな

「結果じやな。ではありません!! 生徒の決闘は校則で禁止してあつたはず!! それに生徒も教師も何故誰も止めなかつたのですか!!」

激昂しているのか、机に手をつき一息に言い切るコルベール。  
それが鬱陶しいのかオスマンは嫌そうな顔で眺める。

「確かにの。じゃが校則云々を言つのであれば、これは当あてはまらんわい

「は?」

「決闘を行つたのは使い魔じや

「なつ! いやしかし、それでも……」

コルベールの顔を一瞥し、オスマンはロングビルに意識を向ける。

「ミス……」  
「はい」

ロングビルは馴れた動作で自分の執務机に向かい、3枚の紙を持つてくる。

それをオスマンに渡し、その後ろに控える。

「それは?」

「ルベールは怪訝な表情でオスマンの持つ用紙を見る。

「これは今回の被害者と加害者の生徒登録用紙じゃ」

「……はあ」

「一人はトイセ・「ザ・クヤキワ。死亡した生徒じゃな。使い魔はバジリスク」

「……先日、召喚の儀を行つたばかりです」

鎮痛な面持ちで語るルベール。

しかし、それを一顧だにせずオスマンは読み上げる

「次にルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエル。被害を受けたのはその使い魔である少年じや」

「なんと……その少年も?」

ふむ。と頷き、書類に付随していた少年のカルテを見る。

「いや、この子は死んではおらん。今は学院とヴァリエール嬢の持つ水の靈水で回復魔法をかけてあるよ」

「……そうですか」

ほつ、と息をつく。

「じゃが、いくら回復魔法をかけても動けるまでは1週間はかかりそりじやがの」

「つ……それほど」

「うむ。顎骨は縦に割られ歯も数本砕けてある、肋骨は全壊、内蔵にも多数の裂傷が見られる。脊髄に傷がなかつたのがせめてもの救いじゃな。また全身の筋肉が異常に消耗してあるよ。正直生きているのは奇跡といえるじゃろうな」

「……」

コルベールは信じられない事を聞いたような驚愕の表情を見せた。

「ん？ なんじゃね？」

「いえ、これは後ほど報告しようと思っていたのですが……」

「時間を取りらんのなら構わんが」

「はい。これを」

服の内ポケットから紙を取り出す。  
それを机の上に置き下げる。

「ふむ。始祖の使い魔が一つ【神の盾・ガンダールヴ】のルーンじ  
やつたか」

オスマンは紙を手にとり興味なさげに眺める。

「はい。それはミス・ヴァリエールの使い魔が所持しているルーン  
の【写し書き】です」

「う

オスマンは一瞬息を呑み、ロングビルを一瞥する。

「では、私は退室を……」

一瞬考え、オスマンはロングビルに声をかける

「いや、構わん。じゃがこれ以降は他言無用じや  
「はい」

オスマンは眼を解し、疲れたよつて溜息をつく。

「始祖の再来かと、確認後オスマンに報告しようと思つていたのですが……」

「うむ。ボルボール君の配慮は正しい」

「はい。あとコルベールです」

「しかし、断定は出来ん」

「それは……はい。ルーンが似ているだけなのかもしません」

オスマンは鎮痛な面持ちでガンドールヴの可能性のある少年の力ルテに目を移す。

もし、本当に「この少年がガンドールヴだった」としたら。  
それを打倒したあの少女は一体どれほどのか……

「オスマン。ミスター・コルベール。話がずれています」

「ん？ うむ。そうじやな、コノベーノ君のズラはずれておるのう」

「ちよつ、おまつ」

「誰がズラの話をしているのですか」

「ん。うむ。話を戻そつかの」

一瞬反論しようとしたコルベールだったが、ロングビルのスルード出鼻をぐじかれた。

そのまま、オスマンが話を戻すので、コルベールとしてはなんとも消化不全な居心地だった。

「さて、今回の加害者となる使い魔じやが……」

ほとんど何も書かれていない書類を見て、オスマンは若干イラだ  
ちを覚える

「生徒の名前はタバサ。使い魔はニンゲンの少女とされてゐる」

その名を聞くと、コルベールは一瞬鳥肌が立つた。

「あの、使い、魔、ですか……」

「うむ。これで君が呼ばれた理由が解ると思つが

「……」

コルベールは俯き、腕の震えを抑える。

「ノルノール君は彼女の召喚に立ち会つたそつじやな」

「はい。あとコルベールです」

「うむ。そして一騒動あつたそつじやが?」

「はい、彼女とは一瞬ではありましたが、杖を交えました」

「その時の感想はどうかの?」

「そうですね。アレと対峙したのなら、あの状態も納得がいきます。生徒では誰も適わないでしょ?」

鏡に映る庭園を眺め、コルベールはギリッと歯を食いしばる。自分があの時なんらかの対処をしておけば……  
そんな後悔がコルベールを襲つていた。

「ふむ。では【炎蛇】としての君に聞きたい。

コルベール、アレを御し得るか?」

ハツとし、コルベールはオスマンを凝視する。

「オスマンッ!…!」

「すまんがの。君しかおらんのじや」

「つべ

俯くコルベール。

それを意に介さないよつにオスマンは話を続ける。

「現状ではミス・タバサに従つておるよつじやが、一旦手を離れれば手の付けようがないじやろつ。そうなつた時、学院から去るのなら良し、しかし残るのであれば些か面倒な事になるじやろつ、アレの氣質は見た所、血を好み、戦を好む、なにより人を殺す事に躊躇がない」

それこそ阿鼻叫喚の地獄絵図が展開される。

「…………」

「どうなのじや？」

遠慮の無いオスマンの問い。

コルベールは諦めるかのよつて溜息をつき、顔を上げる。

「つ

息を飲んだのはロングビルだった。

学院にいる彼とは全く違う表情。いつも自分の事を見ていたあの目が無く、変人と噂されても笑つて流してた。

そんな温厚な彼は消え。

その表情には感情が無く、能面のような無表情。

「程度によるでしょ！」

声もまた感情を殺したような低音。

「ふむ。それはキャンセル能力かの」

「はい。私の確認した所、ラインは完璧にキャンセルされます」

「それは今回の事で確認しておる」

「最悪、スクエア級の魔法でも、あの防壁の突破は難しいかもしません」

「それほどか……」

「推測になりますが、仮にトライアングルで突破可能としても、詠唱の時間を稼ぐ者が存在しません。あの剣捌きは異常です」

「そうじゃの……」

「詠唱はクラスが上がるほど時間がかかります。しかし、時間を稼ぐ壁が存在しません。ラインクラスでは全てキャンセルされ隠しにもならないでしょ」

淡々と語られる言葉は、オスマンにもロングビルにも死刑宣告のようにこしか聞こえない。

「しかし、例外があるとすれば物理的な魔法であれば、あるいは、通じる物も……」

「そうか……」

「なんでしょう」

「君は見ておらなんだな」

そう言つてオスマンは杖を振るつた。

「これから見るのは彼の少女が起こした惨劇じゃ」

鏡が光り、そこにはまだ活氣着いている状態の庭園が映し出された。

「ゴルベールは胸の痛みを誤魔化し、鏡に見入った。

た。

そこに現れた3つの主従、先頭を歩く少女はいつか見た使い魔だつた。

鎧を身に着けていない事から、なんとも新鮮な感じを受けるコルベールだった。

しかし、その少女の声を張ると、マジックアイテムであるひつ剣を抜刀してからは無残な物だった。

放つ魔法は構成から分解され、一粒も少女には届かない。使い魔のバジリスクもそのスピードを生かしきる事なく首を切り落とされた。

そしてその血を浴びる少女。発狂したのか絶叫する生徒。

決闘にもならぬそれに飛び居る少年。

それも空しく生徒の首は断たれ。少年もまた手も足もでずに沈んだ。

「以上じゃな」

再び杖を振り、鏡の映像を消す

「魔法と言つものを持つ端からキャンセルしているようですね……」

正直、コルベールにとってこの程度では惨劇とは言えない規模だった。自身の起こした惨劇に比べれば何と言つ事もないのだ。

だが、それとは別に、サイトの実力に驚いた。  
論点が違うと思い、それは口にしなかつたが。

「うむ。君の言つ物理的な物も、その構成を分解されてはどうにもならん。圧倒的な質量があれば生き埋めに出来るのやもしれんが……」

「希望的観測に過ぎません。そもそも使つた魔法はまさしく質量を持つています。しかし、見ての通り飛礫はあのキャンセルを通る事

……」

は出来ませんでした」

「水ならばどうじや」

「それもまた同様でしょつ。魔法とは構成するもの練り上げる物です、そこに魔力が残存する限りは……」

「効かんか」

「……おそらく」

コルベールは言ひにくそうに言葉を次いだ。

「それに見ましたか?」

「何をかね?」

「あの魔力の放出のさい、血を受け止めていました」

「……物理的な攻撃も通らぬかもしれんと?」

「その可能性も十分にあります」

「ぬう」

「そして、血を運んだあの風、あれもまた自然な物には……」

「……」

二人して押し黙る。

あの少女を敵に回せば敗北がかなり濃厚なのだ。  
炎蛇をもつてしても、敵う見込みが見えない。

「あの使い魔に直接交渉してみてはどうでしょ?」

唐突にロングビルは言葉を発した。

ロングビルとしては口を挟むべきではないのだが、マチルダとしての自分がつい口を開いた。

何故、初めから押さえ込む考えしか出来ないのである。何故、寛容と言つ言葉を思いつけないのである。そんな心情から。

「やはり、それしかないかのう

溜息混じりのその言葉に、ロングビルの中のマチルダが苛立つ。結局、力で押さえつける事しか知らないのだ。他とは違うメイジだと思っていても、やはり変わりはないのだ。  
メイジはまず力から入り、それを持つて条件を提示する事しかないのだ。

「それで、現在彼女達はどこに？」

「ん？ うむ。魔力のパターンは覚えておる、今映そうかの」  
オスマンが杖を振り、鏡の表面が波うち、一つの映像を映し出す。ぼんやりとした映像が線を結び、そして……

「「ウホッ！…！」

「ゴンツ × 2

ロングビルの拳が一人の頭を殴りつけた。  
溜息をつきつつ、鏡面に眼を移し。

「…」

ロングビルは濁った金色と視線が絡み合った。

ところ変わつて、ここは学院敷地内の井戸汲み場。

そこには全裸のアルトリアと、それを頬を染めて眺めているタバサが居た。

タバサとしては川原か湯場に連れていく予定だったのだが、アルトリアが偶然、井戸を発見し「アレで十分です」との言葉と服が溶けるように消えると言う現象で、タバサが畠然としている間に水浴びを始めてしまったのだ。

案内するのを諦め柵に腰掛けたのだが。

「やつぱり川原がいい」

「いえ、大丈夫でしょう」

井戸水を被り、大分血が落ちてている体を見ながらアルトリアは言葉を返す。

髪の編み込みは服を解除すると同時に解いている。

首筋に触る髪の感触がなんともいそばゆく、アルトリアは少し首筋に掛かる髪を撫で付けた。

「ほう」

溜息のように息をつくアルトリアの姿は、何とも艶かしい。

「誰かに見られる」

それを見て気が気でないのはタバサである。

露出狂ではないのは知っている。

アルトリアはとことん周りの田を氣にしていないだけなのである。だが、それとタバサの感じる羞恥とはまた別問題。

自分の使い魔が変な噂を立てられるのはゴメンこうむりたいのだ。もつとも既にかなり噂が立っているのだろうが。

「私とタバサの感知を抜けるなど、出来る者はそういういません。

大丈夫ですよ」

「でも、」

「心配性ですね。見られた所で何か不都合がある訳でも有りません、  
大丈夫です」

そう言う問題じゃない。

そう言いたいタバサだったが、これでは恐らく堂々巡りになるだ  
ろう。そう思い口を噤んだ。

バシャバシャ。

水が体を叩く音を聞きながら、タバサは今一度アルトリアの体  
を見る。

少しくすんだ金髪に、とてつもなく白い肌。とても人が作り出  
した物とは思えないほどに整っている。

それは見れば見るほどに人形のように見えるほど。

あの細い腕に、どれほどの強力じゅうきがあるのか未知数だが、少なくとも  
1メイル程の鉄の塊を自由自在に振り回せる事は確か。

そして、それを振り回せると言う事は、足腰の力もまたそれ相応  
に鍛えてあるのだろう。

タバサには想像もつかないような修練の果ての果て、そのまた果  
てにある極みがそこに居るのだ。

タバサは何とも言いえぬ気持ちになつた。

先ほどの立会いでは殆ど何も解らなかつたような物だった、魔法  
のキャセル能力は知っていた、あれは出会い頭に見たからだ。

しかし、その無効化はどれほどの範囲なのか、そしてそれはど  
れ程の距離で可能なのか。

また剣を持てば最強。無手に置いても武道の経験があるのか構えは一流のそれだつた。他には何が使えるのか。

他にも解らない事はあるが、ただ一つ解る事があつた。

それは、強いという事。

それこそ霞むような高い頂の頂点に立つてゐるのだと、仰ぎ見ても姿さえ見えない場所にいるんだと。  
ただそれだけ。

だが、タバサにとつてそれだけで終らせる事は出来ない事だつた。  
使い魔より弱い主など、どれほどに情けないのか。  
一分野で勝つてゐるのならそれもいい。

アルトリアは広域攻撃が出来ないのなら、タバサが受け持つ。  
そんなスタンスも良かつた。

しかし、タバサは知つていた。アルトリアは自分など及びもつかない程の遠距離攻撃・広域攻撃が出来る事を。

あの星の旭光を。

軍の先頭に立ち、常に彼の人々に勝利を齎した、あの光を。  
何万と言つ軍を二つに割る、強力無比な剣撃を。

これでは、自分が弱点になる。

アルトリアと言つ使い魔の弱点になるのだ。

それがタバサの許せない事だつた。

何故、自分はこれほどに……

「マスター。些か思考に嵌りすぎているようですね」

タバサは、ボウとアルトリアを見ていた視線に力を込める。

怪訝そうに眉を寄せようとして、背後の気配に気付いた。

「誰か来る」

「ええ。歩調からじりやう女性のようぢや」

「すぢりよみ」

タバサは呆れたようにアルトリアを見た。

「なんでしょう?」

「私はそこまで解らないから」

「こればかりは経験することです」

「クンと頷き、ジッヒとアルトリアを眺める。  
アルトリアは尙もバシャバシャと水浴びを続ける。

「着替えない」と

「不要でしょう」

タバサは困ったようにアルトリアを見て、もう一度気配に気が向ける。

大分近くまで来ている上に、ここに来るような気がする。

「ここに来るかも」

「方向から言えばその可能性が高いですね」

全く意に介さない。

タバサはアルトリアの無関心さにホトホト困りはてた。  
どうすれば、服を着てくれるのか……。

「服を「えーーーー?」……あ」

振り向き、メイド姿の女性を眺める。

かなり驚いているようで、タバサとアルトリアを交互に見て  
え？ へ？ はえ？ ええ？！」 などと奇声を上げている。  
まあ、おかしい反応ではない。

「何よ、うだ

先ほどまでは違い、幾分堅い声でアルトリアが話しかける。

「あ、い、いえ。すみません！…」

ワタワタと手を振つてガバッと頭を下げている。  
それも意に介さず、頭から水を浴びるアルトリア。

「え、えーとお」

その態度に何を思ったのかメイドはタバサの方に歩いてきた。

「あの、ミス・タバサです、よね？」

「クンと頷く。

「あの方は、その何を」「洗つてる」

ビシツと指差し、タバサは答えた。

「そ、そうですよね。あは、あはははは

乾いた笑いを上げながらメイドはタバサの隣に腰掛けた。  
なんだろう。と思い、タバサは隣のメイドを眺める。

「綺麗な方ですね。ねえ、ミス・タバサ」

「コックリとアルトリアに視線を移し、コクンと頷く。

「ですよね。……あ、すみません。私シエスタって言います」

ペロリと頭を下げる姿には愛嬌があり、なかなかに微笑ましい。

「でも、なんでこんな所で水浴びなんてされてるんでしょう」

キヨロキヨロと周りを見回しながらシエスタは疑問顔でタバサに問う。

「血で汚れたから」

「え?」

聞き取れなかつたのか、表情はそのままに聞き返す。

「バジリスクの血を浴びて汚れたから」

「……」

サーっと面白い程に、シエスタの顔から血の気が無くなつていいく。

「えつとマサカ……」

「噂になつてる?」

「は、はい」

カチンコチンに固まつたのか、体を全く動かす事無く、答えるシエスタ。

その表情には怯えが多量に含まれている。

「どんな？」

面倒な。そう思いつつタバサはシエスタに尋ねた。

「えつと……」

チラチラとアルトリアを伺い気が氣ではないようなシエスタの態度。

怖いのだろうと、思いながらもタバサは再度聞く。

「どんな？」

「ええと、その殺戮人形とか、地獄から出てきたグールとか、はぐれエルフとか、どこかの国が送り込んできた学院の人を皆殺しにする為の人形とか、そんなのです」

タバサは口メカミを揉み解し、溜息をついた。

確かに、あれを見ただけではそんな噂しか立たないだろう。

それに入形とは、おそらく一期に言いがかりをつけてきた輩の皮肉も混じっているんじゃないだろうか。

「あの、噂のような、その、そそそそそそんな事ないです、よね？ね？」

涙目で尋ねてくる姿は少し可愛い。

タバサもその噂がほとんど間違っているのを知っているので、頷き返し、肯定の意を返す。

もつとも、生徒と使い魔を殺したのは間違い無い事なのだが。

「 もうですね……。」

よかつたーと笑顔で頷き。

再度アルトリアを眺め始めるシエスタ。

その姿を見て、タバサはこの子の将来が少し心配になつたのだが、まあいいかと思いなおし、タバサもアルトリアに視線を移す。

セレには虚空を凝視するアルトリアがいた。むちゅん全裸で。

「 どうしたの? 」

柵から飛び降り、タバサはアルトリアに向けて歩いていく。

「 どうやら、監視されているようだね」

ゾックとかぬけぬけ冷たい声での返事だった。

「 誰? 」

「 さて、セレまでは解りませんが……トモガいのよひですか」

それにタバサも同意を返した。

そもそも女性の水浴びを覗くなど言語道断である。

「 セレのメイド」

空を睨みつけながら呼びかける

「 は、はい」

「 体を拭う物を用意してもらいたい」

「 えつと。なんでもいいでしょつか? 」

「ああ、だが、なるべく清潔な物で頼む」

「はい。少しまつてください」

固い顔ではにかみながら通路へ戻つていくシエスタ。それを見送り、タバサはアルトリアの不機嫌な顔に疑問を持ち、問い合わせた。

「気になる？」

「無論です」

憮然とした返答。

やはり疑問が残る。さきほどまで、見られても構わないと語っていたのに……。

「さつきは見られても良いって……」

「事故ならば、別に見られても構いません。しかし、下劣な野生でもって見られるなら、私は許さないでしょう」

つまり、偶然なら可。故意に見るのは否。と言つ事だった。

まあ、アルトリアが良いといつならもういい。

タバサは呆れにも似た面持ちで、とりあえず納得した。

「ふむ」

アルトリアは少し思考し、指を虚空へと突き出す。

「何？」

クイクイと指を動かすアルトリアにタバサは困惑しながら声をかける。

「不遜な輩を呼び出しているのですが」

「……そ、う」

もう自由に行動してくれ。

幾分疲れたのか、タバサの声に張りがなかつた。

「血の臭いは、大分ましになつたか。この臭いも嫌いではないのだが、仕方ない」

手や髪を鼻に近づけてクンクンしている。

タバサにはもう血の臭いは全くしないのだが、アルトリアにはまだ臭うようだ。

アルトリアの鼻は犬並。

タバサはアルトリアのステータスに【犬の嗅覚】を追加した。

アルトリアは裸のまま井戸に腰掛、タバサはそんなアルトリアを隠すように通路とアルトリアの間に立つていて。

そのまま両者とも押し黙り、少しの時間が流れただ頃。バタバタと駆けてくる音がする。

「すみません。遅くなりました！――

一人が声の方に眼を送ると、先ほどいたメイドのシエスタがいた。両手にバスタオルを抱えて駆けてくる姿は、なかなか微笑ましい。

「『』苦労」

つむ。つとばかりに鷹揚に頷き、アルトリアは労を労う。

「いえ、そんな、タオル取りに行つただけですから」

顔を赤らめながらスッとタオルを差し出す。

「それがそなたの役割だろう。ならばその役を達したのだ、労を労うは当然のことだ」

アルトリアは髪の水分をタオルに吸い込ませる。

「あ、はい。ありがとうございます」

シエスタは俯く。

今まで貴族にそんな事を言われたのは初めてだったのだ。

シエスタは初めて自分のしている事を認められ、なんだか嬉しくなつた。

もつともアルトリアは貴族ではなかつたが。

十分に嬉しさを噛締め、シエスタは顔を上げる。  
そして、疑問をもつた。

「あれ、服はどうされたのですか?」

くるり周りを見回してもそれらしき物がない。  
タバサが持つているのか? とも思ったがそれも無い。

「それならば問題ない」

アルトリアはスッと指を刺す

それはシエスタの背後。

シエスタは振り向き、首を傾げる。

何もないし、タバサしかいないのだ。

「えっと」

「何もないですよね。」

そう声をかけようとした所で人影が現れた。

「あ、ミス・ロングビル？」

手にはこの学院の女生徒用の服を持参している。

「まあ、この程度の配慮はできねばな。例え院の長といえど同じ席になど着く気はない」

「学院長？」

「ええ。恐らくは。ただあの服を持つてくるとは……何を考えているのか」

目を細めつつアルトリアはロングビルを凝視する  
タバサは無表情に見つめる。

「先ほどは大変失礼をしました」

アルトリアに近づきロングビルは頭を下げる。

「全くだな」

服を受け取りつつ、アルトリアは感情の籠らない声をかける。  
その言葉に頬を引き攣らせたのはロングビルとシエスタだった。

「それで、あの不遜な輩の言葉を聞こうか」

髪を結いながらのアルトリアの言葉に、なんとかヒクツク類を抑え、ロングビルは口を開いた。

「トリステイン魔法学院・学院長オールド・オスマン並びに等学院の筆頭教師ジャン・コルベール氏がお会いしたいと仰つておられます」

「そうか」

興味がなさそうにそう答へ、

「ならば此方へと赴け、貴様の元へ行く準備はないと伝える」

そう続けた。

「…………は？」

「…………」

ロングビルとシェスターは何を言つているのか、正確に理解できずに口を開き、啞然としたふうにアルトリアを凝視している。

タバサは予想していたのか、無表情にアルトリアを眺めていた。

「あ、いえ。失礼しました。今なんと？」

「こちらへ来いと言つたのだ」

「…………」

「では、マスターそろそろ昼食です。食堂へと向かいましょ」

頭が痛いのか、タバサはコメカミを揉み解しながらアルトリアを追う。

後に残されたのは、笑いを堪えようと必死に無表情を貫くロングビルと、未だに呆然としたシエスタが残された。

## 7話（後書き）

実はアルトリアの敵キャラとして Fate のキャラクターを出す予定があります。

ただし1名だけです。

その人物を出すのに誰を出すか迷っています。

読者の声を聞かせてくれえ！！！！

### 1・言峰綺礼

「さあ行け。お前の敵はアレだガンダールヴ。倒せずとも良い、主従共に深い絶望を見せてくれ」

### 2・メディア

「あら、とても綺麗な人形がマスターなのね。とても良いわ。もつと私好みの人形にしてあげる」

### 3・ギルガメッシュ

「ハハハ。よう呑み干したセイバー！！ それでこそ我の伴侶に相応しい！！ む。ジョセフよ無粋だぞ」

言峰とメディアならちょっとした仕掛けが。  
ギルガメッッシュなら単純に戦闘。

後、生徒Aの名前ですが途中まで【三銃士】の中のキャラクターの名前を貰うつもりで探してたんですが……面倒になつたので適当につきました。

と言つても、アノ名前を逆から読むと……

「マスター」こちらの焼肉の方が美味しいです」

「いや」

「……何故でしょ？」

「雑だから」

「ある程度雑な食事の方が美味しいのです」

フルフルとタバサは首を振る。

「それにサラダの方がいい」

「ふむ」

スッとサラダが大盛りになつた皿を差し出す。

「これは……確かにマスターの好物でしたか」

「そう」

「確かに名前は……」

「ハシバミ草」

「ふむ。マルト――――ツ――ハシバミ草を入れたハンバーガーを用意しろ――！」

「バカ野郎――！ オメエの食いつぶりのお蔭でこいつちは忙しいんだよ――！」

「む」

そんなやり取りがされている場所は、言つまでもなく食堂だった。しかし、やはりと言ひべきか、昨日までのよだんな活氣は無い。ヒソヒソと囁かれるよだんなザワメキはあるのだが、そこに活氣と

言つ文字は無い。恐れるかのよつに噂話がされるばかりだ。

そして当然のようにアルトリアとタバサの周りに人はいない。

一つのテーブルを境界線のよつに人の波が無いのだ。

その机の上にある料理は多量だが、それも一人にかかるれば瞬く間に消えていく。

一人にとつては別段氣にもならない状態だった。

「遅れたかの」「……」

そんな中、この学院の院長と教師がそのテーブルに近づいてきた。生徒の中には息を飲む者、安堵するかのよつに息を付く者などがありた。

「いや、別に待つていた訳ではないのでな」「ふおつ、君に呼び出されたと思つたがのう」

アルトリアは食事の手を止め、オスマンに目を向けた。

「さつさと座れ。立たれていては日障りだ」「ではそうするかの」

オスマンはコルベールを一警し、アルトリアと対面するよつに椅子に腰掛けた。

「……」

オスマンの背後に控えるかのよつに直立してゐるコルベール。

アルトリアはそれを不快気に眺めた。

彼の纏う気、とでも言つのだろうか、それは警戒心を前面に押し出した物だった。

それを当然と思つアルトリアではあつたが、それでも食事を取つている時にそんな気を当てられては不快になる。

もつとも、ここを指定したのは彼女自身ではあつたのだが。

「貴様も席につけ

「……」

「コルベールは返事を返さず、アルトリアを睨みすえる。

「コルベール君、よいのじや。君も座りなさい」

その声に従い、シブシブではあつたがコルベールはオスマンの隣に座る。

それに満足したのか、アルトリアは食事を再開した。

「ふむ。なかなかの食べっぷりじやのう。若者はこうでなくしてはイカンな」

それを見たオスマンの第一声である。

なかなか、と言うが、それはかなり控えめな評価である。

テーブルの上に並べられた料理の量は軽く見積もつても、6人前。4人掛けのテーブルなのだからそれ位の量はあつて然るべきだろう。しかし、この6人前の料理はすでに8割方アルトリアの腹に収まっている。

そして、テーブルの隅には重ねられた皿が大量に……

隊長モードのコルベールでも青褪めるような量だ。

「そんな事はどうでも良い。要件はなんだ」

少しばかり不満気に、食事の手を止め、口元を拭いながら尋ねた。

「んむ。君も解つておるとは思つが、先の決闘の事についてじや」「ほお、決闘か……」

アルトリアは冷ややかに老人を見つめた。

内心、あれを決闘と呼ばれるのは不快だつたのだ。

自分は確かに己と主人の誇りの為に剣を取つた。だがしかし、あの生徒はどうか？ 誇りの為に自分の前に立つたのか？

……否だろ？

対峙し剣を交えて良く解つた、腐敗した小僧の矜持が。

アレは誇りなどの為に立つたのではない。

ただただ己の欲望を満たしたいだけの、餓鬼にも劣るヒトそのものだった。

誇りの何たるかも知らず。己自身が誇りの権化のように勘違いしている馬鹿だつた。

おそらくだが、アレはバジリスクと言つ上等な使い魔を得て調子にのつたのだろう。

ようは力を見せ付けたかったのだ。

自分は優秀だと。自分は【雪風】の異名を持つ者よりも有能だと。ヒトは容易く力に酔い。力の行使を望む。

アレはその典型的な例だ。

それを、決闘などと言われるのは業腹だつた。

本当の決闘と言われる物を知つてゐるが故に、アルトリアはアレを決闘などと言われたくはなかつた。

「うむ。決闘じゃ。あれは決闘であつた。そうじやう？」

チラリとタバサと見ながらのオスマンの言葉。

その意味を汲み取れないほどアルトリアは愚かではない。

「……」

しかし、自ら認める発言だけはしない。

沈黙返すだけだ。

「」の事自体、アルトリアに「」では腸が煮えくり返りそつた激情を押し込めての反応だった。

「うむ。それでのう、そちらはもういいんじゃ。決闘の末の末路じや致し方あるまいでの」

「」のクソ爺が。とアルトリアが思つたかは定かではないが、彼女の視線はそれだけで何かを殺せるほどの殺意が煮えたぎっていた。それをヒョウヒョウと受け止めるのだからオスマンもただの魔法使いではない。

「それでの、それとは話が異なるのじやが

話を変える為にか、オスマンは顔の前で手を組み合わせる。

「アルトリア君、君つひで教師をしてみんかの？」

・  
・  
・  
・  
「」「」「」「なんだつて――――――」「」「」「

・

聞き耳を立てていた生徒は声を揃え雄叫びを上げた。のだが、

「ほう。それで」

「君の類稀な戦闘スタイルは当学院でも珍しい物でな、その手の訓練としては是非とも実践戦闘科を組みたいのじゃ、そして君にはその担当教師となつてもらいたのじゃが」

一人にはスルーされた。

「……」

「条件としてはそうじやな、死者を出さぬ事。五体満足に授業をする事かの。もちろん給金も支払うがどうじやな?」

ともあれ、一人の交渉のような物が続く。  
そんな中、アルトリアはこの人物の事を考えていた。

オールド・オスマン。

トリステイン魔法学院の長にして、恐らくかなりの戦場を巡った魔法使い。

しかしながら交渉毎は少しばかり不慣れなようだ。いや、これがこの世界の正常なのかもしだれないが、初めから求める物をぼぼオーブンなど交渉の場に置いて下の下だ。

厳密にはオープンしたわけではないが、それでも求める物が見えすぎる。

実践戦闘科？ こちらのスキルを見極めたいだけではないのか。  
教師？ 召喚されてすぐに殺傷沙汰を起こした者に師事するのを認める者がどこにいる？ 精々はみ出し者やこちらを探りたい者ば

かりだらう。あるいは純粹に力に焦がれる者も出るかもしれないが、それでも碌な者ではないだらう。

それに教職につくと言つ事はマスターから一時的にとは言え離れると言う事だ、一体何をしでかすか解らない。ほかにも様々な思惑が透けて見える。

「どうじやな？」

「ふむ」

アルトリアは一考し、返事を返す。

「いいだらう。ただし、条件を付け加える」

「ふむ」

それに対しオスマンは眉を寄せた。一瞬でそれは消えたが……それを見てアルトリアはピンときた。

この老人はあらう事が、自分を見下している。貴族たる自分がこれほどの高待遇を申し出しているのに？

そんな考えが透けて見えた。

「報酬は授業一回につき二〇〇エキュー以上・授業を開く時間は私の自由・授業中に負った怪我の治療費は学院が持つ・私の待遇だが学院に所属しない事とする」

これでも手加減している。

気に入らないご老人の策に乗つてやるのだ。せめて自由は獲得しておきたい。

案の定と言つべきか、オスマンは顔を顰めている。

「それは、ちと欲張りすぎじゃないかの？」

「私の技能を解析、あわよくば盗みたいのだろ。これくらいで成せるのなら安いぐらいだと思うが」

出来はしない。

解析など出来るわけがない。

凛がこの世界を見ればこう言つだらう 「呆れた。<sup>つぶ</sup>補助輪がなければならぬなんて、興醒めだわ」と。

現にこの世界には杖を介さない魔法の組み方があるらしい。

ならば、それが人に適応されない理由はないのだ。

それが成されていないのは一重に、この世界の住人の責任だ。

しかもキュルケに聞いた所、この世界は6千年前から歴史が続いているらしい。

始祖ブリミルやらが魔法の時代を告げたというが、ブリミルと言う名が伝わっていると云つ事は6千年前には歴史を伝える文化があつたと言つ事だ。

だが、この世界に来て未だ2日だが、その六千年と言つ悠久の年月を、この世界は無為に過ごしたとした思えないのだ。

この世界の文化は地球で言う所の15・6世紀と言つた所だらうが、それにしても6千年続く文化がこれほど未熟など在り得ない。世界の全てが停止しているとしか思えない。あるいは故意に発展させないようにしているとしか思えないのだ。

思考を止め、発展を蔑ろにして、停止を受け入れた世界など、まさしく地獄と言つ他無い。

なるほど、これほど自分を捨てるに適応した世界はあるまい。すでに地獄なのだから。

キュルケの話を聞き自分のあり方を確認した時、それを酷く納得

したものだ。

故に私のスキルを解析など出来ない。

思考が止まつていいのだから。生み出す事が出来ないと言つ事は、対応できないと言つ事と同義だろう。

「ほつほつ。そんな事は考えておらんかったが、ふむ。まあ、よいじゃらう。それで手を打つかの」

とりあえず受け入れたのか、オスマンはしきりに額毛を繰り返していた。

内心は何を思つているのか解らないが、アルトリアとしては気になるほどの事でもなかつた。

「用が済んだのならば、去れ。田障りだ」

顎で出口をさすアルトリア。

それに気分を害した様子も無く、オスマンは鷹揚に額毛を出口へと向かう。

それに続くよしにコルベールが向かい。

二人の姿が見えなくなつた所で生徒が一声に騒ぎ出し、どこかへ走りだすものが続出した。

そんな中、我介せずと食事を開始するアルトリア。

それを見るタバサ。

先ほどの話にタバサは一切介入しなかつた。

それはアルトリアが求めなかつたのもあるが、タバサ自身、アルトリアが引き受けた実践戦闘科なる物に参加したかつたからでもあつた。

タバサは自分が無力で在る事には耐えられない。

それは恐らくタバサにとつてのトラウマだろう。

弱い自分は許せない、弱いと自分の全てを奪われる。そんな弱肉強食の概念がタバサには現実的な物として体験しているのだから。

タバサほど力に貪欲な者は珍しいだろう。

そしてタバサもまたそれを自覚している。

力と一重にいつても多種多様。

今は取りあえず自分自身の力を求める事にした。他のチカラもすでに手に入る算段は出来ているのだ。

焦る必要は無い。

求める物は全て手に入る。

そして、手に入れたモノを手放さない為のチカラだ。

タバサは依然食事を続ける使い魔に眼をやる。  
視線が合い、しばし見詰め合つた。

その後、アルトリアから手渡されたコレ。

「……おいしい」

ハンバーガーだったか。

ハシバミ草とドレッシングがマッチしていて普通に美味しかった。



内職のように小説をチマチマと書いてたのですが……  
これは止めた方がいい。

文章が支離滅裂で、誤字なども沢山出てきて、修正だけで時間喰う

……

あと、一人だと書いてたキャラですが、なにやら土郎とアーチャーを呼ぶ声が多いので、少しだけそのキャラが出たらこうなると言うのを書いてみます。

まあ、「おい。本編書けよ」と言つ声もあると思いますが…フ。。

ちなみに今回は文章の修正を繰り返しててこれはヤベーと思つたので、余計な物はハシヨツて書きました。  
短いです。

## 9話・運命（前書き）

この回はちょっとお食事中には向きません。  
また、アルトリアのアルトリアらしさがありません。  
オリキャラがです。

アルトリアが教師の任を受けて2日目  
現在、アルトリアは屋外演習場に居た。  
これは引き受けた授業をする為なのだが、これが始めての授業となる。

だが、この内容は貴族にとつて悲惨な物だった。

アルトリアの授業は早朝からだつたが、まずその心を折る事にした。  
授業が始まり、全部で12名の点呼をとつた後、いきなりこうひぶちまけた。

「いいか。貴様等はブタだ。ブタは反論せず、意見せず、私の指示を完璧にこなす事を第一として行動しろ」

もちろんこんな事を言われそれに従う貴族は存在しない。  
そもそも、その参加者からして少なく。  
魔法至上主義に毒され、魔法を使える自分は特別だと、そう思つてゐるような者達ばかりなのだ。  
中にはアルトリアの指示を聞き、それを黙々と実行する者もいたが、これは極めて少数派である。  
例としてはタバサやキュルケであった。

大半の者はキレて退室するか、攻撃に移るかの二種類。  
退室する者は自分を折る事を良しとせず。しかし、アレに敵うはずも無いと出て行く。

攻撃に移る者は、自身に幾許かの自信があり。しかしながら敵対する者との差が埋めなかつた者達だ。

だが、そのドチラもアルトリアは許さなかつた。

攻撃を加える者には詠唱が終る前に徹底的に実力の差を解りせ。退室しようとする者は何故か扉が開かず、むしろ扉に触れる事も出来ない事態に恐慌を起こしかけた所を殲滅した。

それらを畠倒させ、庭に造られた穴に投げ込み、その中に水を被せる。

それによつて意識を取り戻した者達に更に一矢を以て。

「貴様等ブタ風情が私に攻撃？ 理由も告げず退室？ 許すとでも思つているのかブタ。貴様等は生娘のよつて震え、私に従えればいいのだ。理解出来た家畜から出る」

貴族の子息が耐えられる筈も無い。

しかし罵倒や非難の声はすぐさま収まつた。

声を発した者から順に石を投げつけられ、肩や腕を折られたのだ。その上、

「喋るなブタ共。口を開く事を許した覚えは無い」

そう言われる。

反論したくとも、口を開いていた瞬間には石が飛んでくるのだ。口を開く事すら出来ない。

渋々、穴から出ようとした者もいたのだが、

「貴様、そこから出ると言つ事は私の支配下に入ると言つ事だが、解つてゐるか？」

そう言われて「ハイ。貴女の配下になります」とそう言ふる貴族などこの場所には居ない。

その場限りの事と諦め「はい」と返す。

「しゃべるな。首肯で答える」

それに頷き返した者は、アルトリアに蹴り落とされた。その者が非難の目を向けるのだが、アルトリアはそれに冷めた視線を返す。

「私に空言は通じんと思え」

そう付け加え、その者の腕を砕き蹴り落とした、その後は穴の上に鎮座した。

負傷した者のうめき声も認めぬのか、アルトリアはその者の口に布を突っ込み「ダマレ」と脅しつけた。

そうなればもう動く事さえ出来ない。

息を吸おうと口を空ければ石が、詠唱しようとすれば石が、トイレに出ようとしてれば蹴り落とされ「その場でしり」と言われる。非難の眼を向ければ石が飛んでくる。

何も出来ない。

そして頭上からは絶対零度の視線。

それが1時間に渡つて続けられた。

そんな中、毅然とアルトリアを睨みすえる一人の少女が居た。

1時間後にはアルトリアの指示で柔軟や自主訓練などを行つていた者がノルマを終えてアルトリアに指示を伺いに来たのだ。人数はタバサ・キュルケを含め5名。

全てが全て道理のわからぬ貴族では無いという事か。

実際、アルトリアにとつて二人を除いた3名は意外に感じていたのだ。

タバサ・キュルケを除いた者は全てこの穴に放り込む予定だったのだから。

まあ、中にはアルトリアを観察するような目で見ている者もいる事から、大方 学院長あたりの差し金だろうとも当たりを付けていたが。

ともあれ、それらの者達に指示を出す。  
競い合え。と。

これにはタバサもキュルケも困惑した物だったが、アルトリアの指示はそれだけだった。

言葉の通りに取れば、この五人でのバトルロワイアルだ。  
だが、本当にそれでいいのか解らない。

困惑し、5人で顔を突き合わせていたらアルトリアから声が掛かった。

「開始は私が告げる。時間は私が終了を告げるまでだ、最期まで立つていた者には10分間の休憩を与える。では初め」

と開始が告げられたのだが、誰も反応できなかつた。

5人で困惑する。  
が、静寂が1分切つた所で動く者がいた。

タバサだ。

タバサはまず4人から距離をとり、フライを唱え空中へと舞つた。  
更に後退しつつ低級魔法を唱え始めたのだ。

そうなれば4人の行動は早かつた。

即座にバラバラの方向に走りだした。木の陰に隠れる者、塀を背に氣を伺う者、自身を守る人形を生み出す者、森に隠れ詠唱を開始する者。様々だ。

そして4人の行動を見たタバサは満足したのか詠唱を中断し、自身も森の中に紛れ込み姿をくらませた。

4人をその気にさせる為のブラフだったと言つ事だらう。

ここで教室から移動した屋外演習場の立地を説明するが、学院の敷地内にある一箇所で、基本的には平地だった。

だが、周囲は広大な森に囲まれており、演習場のそこかしこに廃棄されたのであるう瓦礫や用途のしれない金属片などが大量に捨て置かれている。

目で確認出来る広さは縦500メイル横に400メイルと言つた所、その周囲は森だ。

ともあれ、その後は森や演習場の中で魔法が飛び交っていた。  
氷・火・風・土・水。

ほぼ全ての属性が相反し合い。相乗し合いながら打ち交わされる光景は一種幻想的と言つてもいい。

これにはアルトリアも少し感心したのか

「なかなか出来る魔術師もいたものだ」

そう零したほどだ。

そうしてアルトリアが目の前の戦いに目を向けているのを隙と見たのか、フライを使用する者が出了た。

それはたつた一人だったが、周囲の制止の視線を振り切つて、舞つた。

しかし、穴から上半身が出た瞬間、鳩尾に打撃を受けて打ち落とされた。

それは遠方から投げつけられた石だった。

アルトリアは微塵も油断しない。

しかし、その生徒を襲つた悲劇はそれだけではなく、尿意を我慢していたのだが、石の打撃を受け決壊してしまったのだ。もつとも意識を失つたようなので、我慢が限界を迎えたと言つより、体から力が抜けて出でてしまったと言うのが正しいのだが、それでも惨めな物だった。

そしてその姿に未来の自分を見たのか、ここから真剣に出たいと考える者が多い現れ始めた。

あるものは蒼白になり、思いつめたように顔を曇らせ穴を齧る。あるものは赤らんだ顔で打ち落とされた者を見る。ある者はアルトリアを呼びつけ、せめてトイレには行かせてくれと懇願した。

だが、アルトリアは何れも許さない。

それどころか、アルトリアは口を開いた者には石を投げつけ、穴を登ってきた者は殴り、穴へと返した。

「許すとでも？……浅はかだな。貴様等の助かる術は  
ているのだ」「…」

解つ

そう言つてバトルロワイアルに目を向ける。

その背を睨み付ける者の数は2・3名となつた。

それから2時間、戦闘が続けられ、アルトリアが終了の合図を送

つた。

その間、穴倉の住人の何名かが耐え切れず恥をさらしていたが、アルトリアはなんの許しも与えなかつた。

そして、戦闘が終了したのを知つた生き残りが帰つてきたのだが、タバサと茶髪の青年一人だけだつた。

その一人にしても衣服はボロボロで髪も顔も汚れている。焼け焦げた跡、乾燥して何やらモゲ落ちたような跡、鋭利な刃物で切り裂かれた跡など様々だ。

タバサを見た瞬間のアルトリアはいつそ鬼かと思う程恐ろしい形相をしていたのが、「これも訓練…マスターの為なのだ…ツク、耐えよ」などとブツブツと怖かつた。ともあれ、一人に指示がだされた。

「二人は敗れた者の回収を、その後10分の休憩を与える」

それだけを指示し、一人が森に引き返すのを確認したあと、クリと体を反転させ、穴を覗き込む。

すでにアルトリアに敵意を向ける者は一人となつていた。

「口を開く事を許す」

この程度で……軟弱な。

そう思いつつアルトリアは許可をだした。

そして一声に異口同音に叫び声が上がつた。

「出してくれ…！」

と。

だが、アルトリアは許さない。

「その為に成すべきは何か」そう問う。

それは皆、理解していた、服従だ。初めに逆らつたのが原因。そして、彼女が求めた物は奴隸の如き服従だ。

だがそれは貴族として認められない。

異臭が漂う中でも、それだけは譲れない一線だつた。

外で彼女の指示に従つている者達は何を考えているのか。あれらは誇りの無い不埒者。

それが穴倉の生徒達に共通する認識だつた。

もつとも外の5人はそれほど酷い扱いを受けているわけではない。彼等の中にも反意を持つ者もいるが、それをアルトリアが咎める事はなかつた。

求めている物が違うからだ。

ともあれ、皆押し黙り、死ぬ一歩手前のような顔色の悪さだつた。そんな中で一人の女生徒が声をあげた。

「貴女、一体何がしたいのですか」

異臭が漂う中、唯一人未だアルトリアに敵意を向ける者だつた。服装は学院指定の物、マントはしておらず、それは他の女生徒の膝にかけられている。

靴は汚物で汚れ、服にも汚れた跡が見える。

それでもそんな中で意地を張り通す。心が半ば折れ、憔悴する者達の中、彼女だけが異質だつた。

「それが解らぬ内は、そこから出る事は出来ないだろ?」

アルトリアはその少女を賞賛する。

周りが軽い物ではあるが絶望の淵に手を掛けているにも関わらず

自分を見失つていない。流されていないのだ。

これを強いと言わず何と言つのか。

英雄の資質と言う物があれば、彼女のような者が持つ何かだろう。  
おそらくあの少女は温室育ちでは無い、蝶よ花よと育てられた柔  
な貴族ではない。

あの毅然とした立ち姿にはリンを連想させる何かがある。  
折れず曲がらず。毅然とし。チャンスを逃さぬ狡猾さ、むしろチ  
ヤンスを作り出そうとする行動力。なにより諦めない心か。  
そんな物が垣間見える。もつとも、まだまだ未熟ではあるが、身  
の内に秘めた才は如何程か…

「因果応報、そう言いたいのですか」

やはり聰明だ。

アルトリアは無表情にしかし、感心したように少女をみつめた。

「面白い。貴様は出してやる」

しかし、少女はそれに首を振り拒絕した。

「いいえ。私は出られずとも構いません。しかし、出せるのであれ  
ば、変わりにこの手を出してあげてください」

少女は屈みこみ、啜り声をあげて泣いている少女を肩に抱いた。  
アルトリアはその少女達を觀察した。

一人は先ほどの少女。

やはりこの中で毅然としているのが田立つ。  
背も170はあるつかと言つ、女性にしては長身でスレンダーな  
体形だ。

髪も長く、濃い紺色の髪を腰まで伸ばしていた。

翡翠の色をした目は、何者にも支配されぬとばかりにチラチラと揺れ、なかなかに頬もしい。

そしてその少女に抱かれた少女。

こちらの少女は些か体形が幼い。

マスターほどではないが、この少女も体に変調を来たしているよう見える。

髪も先の少女とは正反対に、薄い銀色の髪を首筋で切りそろえている。

今は腕の中でしゃくり上げ、股を濡らしている。

少女は先ほどから「いけません 様」と泣きながらの懇願を繰り返している。

どうやら主従か、それとも他の何かか、浅からぬ縁がある関係のようだ。

「どうか、これ以上の辱めをこの子に与えるのは耐えられません」

懇願だった。

それでもアルトリアは無情に見下ろす。

それを見た少女は頭を下げた。

地に頭を擦りつけ、髪や顔が汚物で汚れるのも構わず、地に頭を擦りつけた。

周囲は息を呑み、絶望していた表情は無くなつた。

それに変わり、困惑し奇声をあげる者、在り得ないと頭を振る者が始めた。

中には「止せ」と声をかけ、腕をとつて立たせようとする者もいた。

しかし、それを無視し「お願ひします」と、それだけを繰り返した。

庇われた少女は取り乱し、泣き喚いている。が、それも無視して

いる。

それを一時、眺めたアルトリア。  
その目すぐに冷たい色はなかつた。

「いいだう」

その返答に俄かに周りの者は浮き足立つたが、少女は頭を上げない。

「だが、穴を出る意味は理解しているな

問い合わせではなく確認だつた。

「……」

少女は伏せた状態で歯噛みした。

ギリギリと音がなりそうなほどに下唇を噛締め、血がしたたる。30秒ほど経過し、周りが注目する中。

少女が顔を上げた。

口元から伸びる赤い跡が、どれほど葛藤が少女の中であつたかを物語つている。

だが、

「承知しました」

清んだ返事だった。

恨みつらみもない、清んだ声だった。

だが、その返答を聞いた底われた少女は泣き叫んでいた。

「私の所為で」、「申し訳ありません」、「「」めんなさい」、「「」めんなさい」めんなさい」、「めんなさい」と慰める。

「名を聞いておいたか

抱き合ひ少女を見つめ問い合わせた。  
少女はアルトリアに向き直り。  
告げた。

「私の名は【ケレモン・シュバリエ・ド・ラ・フール】」の子  
の名は【モルガナ】。没落した家ではありますが、私の事はケイと  
凛とした威風すらも漂つ名乗り。そして、この世界での片腕との  
出会いだった。

## 9話・運命（後書き）

8話にて同じく、修正しまくって修正つかなくなつたので、不要部分は端折つて投稿。  
みじけー・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4447f/>

雪風と黒騎士（ゼロの使い魔×Fate）

2010年10月13日11時12分発行